140th
SINCE 1880

Be Gentleman!

山梨県立甲府第一高等学校創立140周年記念誌

Kofu First High School

山梨県立甲府第一高等学校

山梨県立甲府第一高等学校創立140周年記念誌 140th SINCE 1880

Be Gentleman!

強行遠足出発点

賛天地之化育

Be Gentle

Be Gentleman

contents 140th since 1880

目次

口　絵
目　次
巻頭言

「創立140周年記念誌刊行に寄せて」
山梨県立甲府第一高等学校　第40代校長　小林俊一郎　2

「引き継がれる母校愛に感謝を込めて」
創立140周年記念事業協賛会　会　長　金丸　信吾　3

「母校への思いに感謝」　甲府中学・甲府一高同窓会　第25代会長　丹沢　良治　3

「襷をつなぐ」　甲府第一高等学校PTA　令和2年度会長　若月　栄治　4

「時代と私たち」　甲府第一高等学校生徒自治会　第73代会長　長田　大和　4

特集 I「創立140周年記念事業」

・記念式典・記念講演　6
・記念事業寄贈品紹介　12

特集 II「この10年」

・平成23（2011）年3月11日14時46分18秒　13
・伝統の「強行遠足」を繋ぐ…　14
・創立130周年記念事業「日新基金」の活動　16
・制服にみる「不易と流行」　17
・英語科から探究科へ　18
・部活動の10年　19
・100年目の感染症騒動　20

特集 III「一高の至宝」

・校章…「桜花」から「ヤマナシ」へ　21
・校歌にみる思い　22
・校是に込められた本校の理想　24
・一高生に語りかける至宝たち　26

雑　記　38

付　録

・本校創立140年の歩みと日本と世界　39
・歴代校長　47
・歴代同窓会長　50
・歴代PTA会長　51

奥　書

・編集委員会名簿・編集後記・奥書

第40代校長
小林　俊一郎

創立140周年記念誌刊行に寄せて

令和2年（西暦2020年）は、本校創立140周年にあたる大変意義深い年でありました。また同時に、世界中の人々にとっても、新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより、あらゆる面でそれまでの生活が一変した苦難な年でもあったことを記憶に留めておきたいと思います。

創立140周年記念事業の実施に当たっては、平成30年11月に、元同窓会会長の金丸信吾氏を会長とする「山梨県立甲府中学校・甲府第一高等学校創立140周年記念事業協賛会」が組織されました。そして母校の教育の発展と充実に資するための事業実施のために、協賛会募金活動が展開されました。記念事業協賛会の方々のご奮闘で、協賛募金は目標額を超え、甲府一高が最も必要としている教育環境の整備を実現していただきました。具体的には、各教室へのICT機器（コンピュータ・プロジェクター・スクリーン）の導入、ワゴン車の購入、既存の学校自動車（マイクロバス・10人乗りワゴン車）の整備及び備品購入、更には全校生徒職員に対し、齋藤孝著『読書力』（岩波新書）をご寄贈いただきました。令和2年10月22日（木）には、本校にて記念式典・記念講演（講師：甲斐雨端硯本舗13代目代表 雨宮弥太郎氏）を行い、この140周年記念誌刊行をもって全ての記念事業が完了となります。これまで実質3年に亘り、事業の企画・準備・推進・運営にあたられた協賛会委員、同窓会、PTA、学校教職員、そして関係者各位の並々ならぬご尽力に対し、深甚なる謝意を表します。

本校は、ここ半世紀、約10年スパンで周年記念行事を行ってきました。その時々において、高校を取り巻く教育の流れや本校の設置学科も少しずつ変容してきています。一つの大きな変革は、2007年（平成19年）3月から入試制度が総合選抜制度から全県一学区制度に変わり、同時に前期募集制度を導入したことがあげられます。県内どこからでも希望する高校を受験することが可能となり、受験の機会も前期・後期の2回が可能となりました。この年を境に、各高校はそれまで以上に、自校の魅力化に力を注ぐようになりました。本校は、普通科に加え1991年（平成3年）専門教育学科である「英語科」を併設し、2004年（平成16年）に文部科学省“スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール−SELHi”指定校となりました。その指定終了後、2014年（平成26年）に“スーパーグローバルハイスクール”（SGH）の指定を受け、2年後の2016年（平成28年）には、「英語科」（1学級）が「探究科」（2学級）へと学科改編しています。また、2019年（平成31年）には、SGHの後継事業である“地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）”のアソシエイト校となり、翌2020年（令和2年）には、“同事業（グローカル型）”の本指定を受けました。このように、本校は、時代の変化に対応しながら、常にローカルな視点とグローバルな視点を備え、課題解決能力を有した人材の育成を目指した教育を継続して参りました。

今後も、140年の長い歴史と伝統を持ち、本県を代表する高校として、文化、芸術、スポーツ活動の充実を図り、有為な人材輩出のために脈々とその歩みを進めて参ります。

結びに、140周年記念事業にご協力いただきました皆様に重ねて感謝申し上げるとともに、今後とも変わらぬご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げ、記念誌刊行のご挨拶といたします。

創立140周年
記念事業協賛会
会長
金丸　信吾
(昭和38年卒)

引き継がれる母校愛に感謝を込めて

山梨県立甲府第一高等学校は、明治13年の創立から昨年10月、創立140周年を迎え、多くの御来賓、関係者をお招きし、在校生と共に記念式典を開催いたしました。

思い起こせば私の入学時が80周年であり、それからすでに60年の歳月が経過したことになります。

「140年」この数字には、我々の先人達が築き上げて来た輝かしい歴史と伝統が詰っており、そしてこのことが甲府一高の大きな財産であり、又我々の最も誇りとするところであります。

この大きな節目にあたり、同窓会、PTA、学校の三者を中心に「創立140周年記念事業協賛会」を組織し、母校の教育環境の充実と発展に資する事業を実施することを決定し、全卒業生2万人余の皆様に対し協賛金の御協力をお願いいたしました。

目標金額は4,000万円でありましたが、予想外のコロナ禍による経済状況が非常に厳しい時にもかかわらず、5,000万円を超える協賛金を達成することが出来ました。これも偏に同窓生、保護者の皆様、そして歴代校長を始めとする教職員の先生方の甲府一高に対する熱き母校愛の賜物であり、協賛会を代表して心から感謝と御礼を申し上げます。

この協賛金は当初の事業計画に基づき、有効、かつ適切に、「文化の香りのする懐の深い進学校」を目指す母校の為、活用させていただきました。今回創立140周年の記念誌の刊行にあたり、事業内容、決算報告も同封させていただきましたので、御承認をいただきたいと思います。

協賛会は、記念誌の発行、発送をもって解散となります。

協賛会の会長としては全くの力不足の私でありましたが、多くの皆様方の御協力に支えられ、何とか当初の目標を達成することが出来ました。心から感謝を申し上げます。

昨年は、誰もが予想出来なかった新型コロナウイルスの感染拡大で大変な年でありましたが、早期の終息を願いながら、甲府一高の益々の発展と皆様方の御繁栄をお祈りいたしております。

同窓会 第25代 会長
丹沢　良治
(昭和41年卒)

母校への思いに感謝

私は、同窓会、PTA、学校の三者で組織された「創立140周年記念事業協賛会」(会長は金丸信吾元同窓会長)の役員(参与)として、宮島前会長とともに母校の教育環境の充実と発展に資するこの事業に携わってまいりました。協賛会の募金活動におきましては、コロナ禍での厳しい経済状況の中ではありましたが、多くの同窓生のご尽力をいただき、設定した募金目標を大幅に越える成果を出すことができました。中でも各学年の常任理事、幹事諸兄の同級同窓生への呼びかけには胸迫るものがありました。新旧の母校職員、PTA会員の多大なご尽力は感謝のかぎりですが、同窓会も貢献し得たことに、安堵とともに、皆様方には心より感謝申し上げます。

母校は140年の歴史の中で、これまで何度もさまざまな困難や試練に遭遇してきましたが、最大のものは太平洋戦争でした。戦後の教育改革により旧制甲府中学から新制甲府第一高校へと改編され、新生日本とともに新たな出発をしました。困難な時にこそ、人の真価が問われるという意味の「疾風勁草」という成語がありますが、同窓会は甲府中学の時代も、甲府一高になってからも、どんな苦難、試練(コロナ禍もその大きな一つ)の時期においても母校を強靭に支えてきました。同窓生の母校への熱い思いの根源力は何なのでしょうか。それは、甲府中学・甲府一高に学び、師と友と出会い、青春を共にした絆に由来するものではないかと、私は思います。

この思いを強い力にして、本会は母校の最大最強の応援団でありたいと願っています。

PTA
令和2年度会長
若月　栄治

襷をつなぐ

甲府第一高等学校、創立140周年を迎えましたこと、心よりお祝い申し上げます。同窓生の皆様には、日頃PTA活動にご理解、ご協力を賜り感謝申し上げます。

2020年、私たちがかつて経験したことのない新型コロナウィルスとの戦いの年となりました。その状況下においても、心強いご支援を賜りました。頂いたプロジェクターやスクリーン、パソコンなどは、オンライン授業において早速活用させて頂き、学校生活に役立たせて頂いております。初めてのオンラインによる授業で、不安が多々ある中、このように支えられている環境に安堵し、前を向いて進んで行く活力にもつながっています。

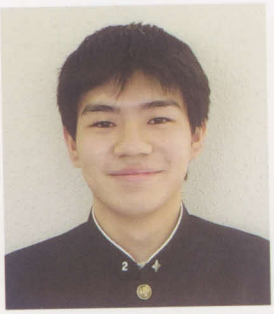
まだコロナとの戦いは収束してはおりませんが、10年後、20年後に今を振り返った時に、「私たちは、戦いを乗り越えることが出来た! あの時は頑張った」と思えるよう、新しい生活様式に柔軟に対応していきたいと思います。

学校行事の多くが縮小、中止となり、生徒の皆さんはじめ、先生、保護者の皆様も悔しい思いをしました。その中で、一高の大切な伝統行事である強行遠足を開催することが出来たことはとても感慨深いものでした。前年、大型台風により中止を余儀なくされたことから、なんとか開催したいと先生方、PTAの皆様、同窓会の皆様のご協力により開催に至りました。新型コロナウィルスへの感染対策を万全にし、男子43.8km、女子31.0kmと県をまたぐことなく行われ、無事に次の代に襷を繋ぐことができました。

「どんな状況の中でも、できる最善策を模索し、実行していく」この経験は、私達の人生において、どんな変化にも柔軟に対応できる力となると信じております。

そしてその力が、この一高の未来を支えることと期待しております。

最後に、甲府第一高等学校の益々の発展と、皆様のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げて、祝辞とさせて頂きます。



生徒自治会
第73代会長
長田　大和

時代と私たち

県内随一の伝統校、甲府第一高校。その歴史は遂に、140周年を迎えました。

私は、この140年という歳月こそ、一高の伝統であり、その懐の深さの象徴する、一高の誇りそのものだと感じます。そして、その一つ一つが、多くの先輩方の思い出に囲まれて創りあげられた本校の大切な財産です。改めて、この記念すべき記念の年に籍を置けたことを喜ばしく思います。

しかしながら令和2年、創立140周年の年に、私たちは得がたい経験をしました。新型コロナウイルス感染症の影響で、学校は3月から5月末まで休校となり、当たり前のように過ごしてきた日常生活が、あまりにも簡単に失われてしまいました。そんなことを経験して、初めて「何気ない日常が、当たり前ではないこと」「自ら望んでやっていたはずの勉強や部活動であったこと」に気づき、今更ながらに友人や家族、学校の先生方の存在の大きさを痛感しました。

新入生にとっては、入学式や應援練習も行えないまま、高校生活が始まり、困惑したでしょう。6月に予定されていた一高祭も見送りとなり、2・3年生は伝統を継承していくことに不安を覚えることもありました。そのような状況下でも、9月に應援練習の代替行事を行えたこと、10月には県内のみの縮小コースとなりましたが、強行遠足を実施していただけたことは、困難な状況下にある私たちに勇気や自信を与えてくれた、まさに「希望の光」を見た思いでした。

私たちは厳しい状況を乗り越え、様々なことを経験することができました。この経験は、私たちの周囲の人々の支えがあったことや、私たちの自身の思いが、「一高生全員が会員である。」という精神にもとづいて結実したことで生み出されたものでしょう。

今、私たちは記念すべき瞬間から、新たなスタート地点に立っています。未知の困難を経験した私たちは、流れゆく時代の中で、決して流されることなく、私たち自身で新しい時代を創り上げていきます。そして、いつか進化・深化を遂げた私たちが一高を支える人材として、一高や在校生の「希望の光」となれるよう頑張りたいと思います。

山梨県立甲府第一高等学校 創立140周年記念誌

140th SINCE 1880

Be Gentleman!

特 集

特集Ⅰ
創立140周年記念事業

特集Ⅱ
この10年

特集Ⅲ
一高の至宝

特集Ⅰ

創立140周年記念事業

山梨県立甲府第一高等学校
創立140周年
記念式典

日　時　令和2(2020)年10月22日(木)　13:00
会　場　本校視聴覚室(リモートで各HR教室に映像中継配信)
次　第　(司会:教務主任　河西秀章　教諭)

1　開式のことば
2　国歌演奏
3　校長式辞　・山梨県立甲府第一高等学校　第40代校長　小林俊一郎
4　来賓祝辞　・創立140周年記念事業協賛会　会　長　金丸　信吾　氏
・山梨県立甲府第一高等学校同窓会　第24代会長　宮島　雅展　氏
・山梨県立甲府第一高等学校ＰＴＡ　令和２年度会長　若月　栄治　氏
5　来賓紹介・祝電披露
・山梨県立甲府第一高等学校　事務長　久保倉正二
6　生徒自治会会長挨拶
・山梨県立甲府第一高等学校生徒自治会　第73代会長　長田　大和
7　事業報告　・山梨県立甲府第一高等学校　教　頭　奥石　登
8　感謝状ならびに記念品贈呈　本校歴代校長　第36代校長　跡部　和　氏
第37代校長　奥田　正直　氏
第38代校長　赤池　亨　氏
第39代校長　堀井　昭　氏
9　受賞者代表挨拶　・跡部　和　氏
10　校歌演奏
11　閉式のことば

column　今から70年前

『創立70周年記念誌』には創立記念式典の次第が載っている。当時は「記念式」という名称であったようだが、これによると「午前九時半　生徒・来賓入場」「午前十時開式」「開会の辞」「君が代斉唱」「学校長式辞」「祝辞」「校歌斉唱」「閉式の辞」、続いて表彰式が執り行われ、「開式の辞」「表彰式並感謝状贈呈」「協賛会長挨拶」「学校長挨拶」「謝辞(職員代表・同窓会代表)」「閉式の辞」「退場」。式後には正午より音楽室において祝賀午餐会、午後二時より御崎神社において慰霊祭、そして午後五時より橘町(現在の丸の内)ときわにおいて祝賀晩餐会が催された。

驚いたのは記念式の祝辞の数と登壇者である。文部大臣、教育委員長、知事、県会議長、甲府市長、山梨大学長、高等学校長代表、市内中学校長代表、協賛会長、同窓会理事長、PTA会長、自治会長と、12人の来賓が登壇し、その後に祝電披露が行われている。

創立140周年記念式典はコロナ禍の影響を考慮して、当初予定していた会場をYCC県民文化ホール・大ホールから本校に変更した。感染症防止対策を徹底する中で、招待する来賓も少数に限り、本校視聴覚室を主会場として、全校生徒とは各教室のパソコンと単焦点プロジェクター、スクリーン(創立140周年記念寄贈品)を利用してオンラインで結んだ。

70年前の式典と比べると、隔世の感があるが、最も驚いたのが、70年前の式典において12人から祝辞が述べられたにもかかわらず、式は午前10時から2時間以内で終わったということである。

山梨県立甲府第一高等学校
創立140周年

記念講演

日　　時	令和2（2020）年10月22日（木）　14:30
会　　場	本校視聴覚室（リモートで各HR教室に映像中継配信）
講　　師	創業330年甲斐雨端硯本舗　13代目　雨宮弥太郎　氏
演　　題	「創造すること、生きること」
講師紹介	山梨県立甲府第一高等学校　校　　長　　小林俊一郎
花束贈呈	山梨県立甲府第一高等学校生徒自治会　　青木　希美

講師略歴

雨宮 弥太郎（あめみや やたろう）

昭和36（1961）	甲斐雨端硯本舗の13代目として山梨県に生まれる
昭和54（1979）	山梨県立甲府第一高等学校　卒業
昭和60（1985）	東京藝術大学彫刻科　卒業
平成元（1989）	東京藝術大学大学院　修了（彫刻・美術教育）
平成2（1990）	第37回日本伝統工芸展初出品初入選（以後，継続出品）
平成17（2005）	日本橋三越本店にて個展（2008年，2011年，2014年以後3年おきに開催）
平成18（2006）	第53回日本伝統工芸展にて新人賞受賞
平成24（2012）	第52回東日本伝統工芸品にて日本工芸会賞受賞
平成25（2013）	Exhibition “Contemporary KOGEI Styles in Japan”出品（米国フロリダ州森上博物館）
平成26（2014）	日本伝統工芸展60回記念「工芸からKOGEIへ」展 出品
平成29（2017）	薬師寺「平成の至寶83選」展
平成30（2018）	国民栄誉賞の記念品の硯箱内の硯を制作

講師からのメッセージ

甲府一高140周年おめでとうございます。伝統の重みは力強い気概をもたらしてくれると思います。私も330年続く雨畑硯に携わり、伝統は大きな力となっております。

その上で、今までの私を導いてくれたのは“芸術への憧れ”だったのではないかと思います。一般に芸術は贅沢なものというイメージがあるかもしれません。しかし本来、生きていく上での根本にある感性なのだと思います。芸術はヒトの創造性に基づいています。そしてその創造性は全ての人の中にあるものです。様々な思い込みがその創造性の扉に気付きにくくなってしまっています。皆さんが自分の内にある創造性に気付き、羽ばたかせるきっかけとなる事ができたら幸いです。

山梨県立甲府第一高等学校
創立140周年記念講演

創造すること、生きること

甲斐雨端硯本舗　13代目
雨宮　弥太郎
（昭和54年卒）

甲府一高の140周年、本当におめでとうございます。只今、御紹介にあずかりました雨宮と申します。各分野の指導的な立場におられる来賓の方々を前に、私などが壇上から話をさせていただくことを恐縮に思う次第ですが、御容赦いただきまして、話をさせていただきたいと思います。

甲府一高も140周年ということですが、私の家も330年という歴史で雨畑硯の制作に携わっています。伝統の重みというか、伝統に助けられて、私がここにいるのも、私自身も努力しているつもりではいますが、先祖の積み上げてくれた歴史があって、ここに呼んでいただける要因になっていると思います。

一昔前は硯も一大産業でした。夢の職業として硯職人を挙げる子がいたほどでした。しかしながら身近な実用品ではなくなり、産業として成立させるのが難しい時代になっています。これから、こういった伝統文化をどのように発展させて、次代に引き継いでいくかは私にとっても大きな宿題だと感じています。今回は硯に対して、どういう価値観を新たに創造していくのか…という観点からお話をさせていただきたいと思います。

ところで私の一高時代、卒業したのは昭和54年で、当時は古い校舎でした。久しぶりに訪ねてきても、当時の校舎は一つもないという状況ですが、たたずまいは変わらないもので、一高の伝統を感じるとともに「帰ってきたな」と実感します。

一高時代の思い出を語れれば良いのですが、人とコミュニケーションをとるのが苦手な方だったので、素晴らしい青春の思い出というのは語れません。でも、逆にそういった者でも、自分の道を進むことによって、この場でお話させていただける機会を与えていただける。クラスの人気者でなくても大丈夫だよ…という意味では、何かためになる話ができるのではないかと思います。

高校時代、唯一自慢できるのは強行遠足です。高校2年の時、図らずも1位になりました。狙っていたわけではなかった。瞬発力や運動神経が良いわけではありませんでしたが、鰍沢に住んでいたので、それまで甲府間を自転車で何往復もしていたので体力はついていたのかもしれません。当日、出発して、いい天気だったので気持ちよく走っていたら、竜王の手前で伴走してくれていた人から「トップだよ」と教えてもらって、びっくりしてしまいました。そうなると、人間、欲が出てきてしまうもので、「もしかすると、このまま行けるかもしれないな」と思い、ひたすら歩いて、最後は足を引きずりながら何とか1位で到着することができました。真夜中の道を歩くのは不安でしたが、先生方や保護者の皆さん、卒業生の皆さんに支えられました。そして、この経験は「コツコツやっていれば、何とかなる」という自信になりました。

3年の時には、2年の時にトップになったので、やはり狙いますよね。当然周りからも期待されていたので、内心「2連覇するぞ」と思っていました。実際、当日も調子よく飛ばしていたのですが、ちょっと予定が狂うできごとがありました。竜王の手前くらいで同じトップを狙う同級生グループから「途中まで一緒に行こう」と声をかけられ、そこで一緒に歩き始めたのですが、それが誤算だった。僕は何で2年生のときにトップになれたかというと、思いがけず先頭になり、後は必死に逃げきったからです。私は先行逃げきり型だった。しかし、先行す

べき時に仲間と行動を共にしたことで、後半に強い仲間について行くことができなかった。それでも7着でゴールできたのは幸でしたが、一緒に歩こうと言われた時に自分のペースを知っていたら、「俺は先に行く」というべきだったかもしれない。でも、あの状況でなかなか言えなかった。どちらが良いとは言えませんが、何を目的にするかで変わるかなと思います。私に、何が何でも2連覇してやるという強い意志があれば、「先に行く」と言ったかもしれません。でも、そこまで強い意志もなく、仲間と一緒に行くことになった。仲間との絆を深めることも強行遠足の大事な要素だと思うので、どちらが正解とは言えません。ただ、あのときにどういう選択をすべきだったかは未だに考えることがある。賞をかけるか仲間との絆を大切にするかを、強行遠足は考えさせてくれる機会でした。そんなことを気にするのは小さい人間のように思われるかもしれないので話をすることを躊躇しましたが、自分にとってはすごく学んだところだったので話しました。自分をどう見る…、仲間との関係は…目標はどこに立てるのか。それからも時々思い返すことで成長することができたと思います。

なぜ家業を継いだのか、度々、問われることがあります。まず、子ども時代から、物を作って遊ぶ事が大好きだった事が挙げられると思います。山の木や竹で何かを作ることが遊びに直結していた事が影響していると思います。その上で「芸術に対する憧れ」の気持ちが大きく、その憧れに近づきたいという思いがあって大学に進学。今に続くと感じています。そのことについて、どのように成長してきたのか紹介したいと思います。

私が美術の方面に進むことを決意したのは、高校の文理選択のときでした。父も芸大だったので美術方面を意識して勉強するようになりました。でも、振り返ってみると、高校の時にデッサンの練習を始め、大学に入り、彫刻の基礎を学んで芸術をずっと追求してきたつもりだったのに「芸術とは何か」全くわかっていなかった。そのことを今すごく感じます。

今回、各学年1クラスずつアンケートをしてもらいました。アンケートの質問項目は、「芸術と聞いて、真っ先に連想することは何か?」「なぜそれを芸術と思うか?」「芸術は役に立つと思うか、それはなぜか?」という3つで、これに対して直感で答えてもらいました。

芸術について、私が当たり前の常識だと感じている事が、実は他の人にはそうではない。「印象派」も知っていて当然と思ってしまうのですが、そうでない人はたくさんいます。知らない人に対して、当たり前だと思って話すと全く伝わらない。そこで、生徒の皆さんはどのように認識しているのか…ということを知りたかった。

いろいろな回答がありました。最初の質問に対しては「絵画、彫刻、音楽…」などの芸術一般のジャンルを挙げる人が多かった。そのような中で「一般人が理解できないもの」「自由なもの」などの面白い回答もありました。固有名詞を挙げた人もいて、ピカソと芸術を結び付けて回答された人も多くいました。スペイン内戦の時にゲルニカが爆撃されて、その報を聞いてピカソが描き上げた「ゲルニカ」という巨大な作品があります。見えたものを忠実に写して描く人にとっては、決して写実的ではない。これはピカソが自由な感性を発展させた結果ですけど、自由に発展させた結果が「理解できない」という感想になる。でもピカソは、最初から「ゲルニカ」のような絵を描いていたわけではなく、最初は写実的な絵を描き、次第に自由な実験を重ねるうちに変ったアプローチの作品になっていったんです。どうしてこうなっていったのか。それはピカソが、自由に表現を追求していった結果でした。では、これがどうして価値あるものになるのか。

よく芸術家は変人だという評価がありますが、物事を自由に見るということを探究していくと、他の人と違った視点で物が見えてくる。例えば科学の世界でガリレオ・ガリレイはどうでしょう。自分で改良した望遠鏡で宇宙を観察することによって、いろいろな発見をしてコペルニクスが唱えた地動説を更に進めましたが、これが異端だと思われる。「地球が動かない」ことが当たり前だった当時、「地球が動く」などと言うことはおかしなこと。でも、ガリレオは自由な観察を追求していくことによって、他の人とは違うことが見えるようになっていった。そこにピカソとの類似性があると思います。一つの物事をとことん追求する中で、いろいろなものの見方をしていくと他の人と違う見え方をするようになる。それが大切なのです。新しい視点でものを見て考え行動する。「変人」と言われる所以です。

アンケートの2問目、「なぜ、それを芸術と思うか」という質問に対して、「それが人の心を感動させるもの」という意見の一方で、「価値が理解しがたい」「日常のことでは言い表せないこと」という意見もあった。ある意味、分からない。その「わからないもの」に対して、どうやって向かっていくのか…これが芸術にとって大切なことだと思います。回答の中に岡本太郎を挙げる人もいました。「芸術は爆発だ」は1980年代に岡本太郎が出演したコマーシャルで有名になったフレーズですが、それがまだ高校生にも知られているということは、すごいインパクトがあった言葉だと感じます。ただ、す

ごくシンプルでわかり易いのだけれど、危ない言葉です。それ故に誤解を与えている。この言葉からは、何にもとらわれずにメチャクチャなことをやれば、斬新で新しいことができるというイメージがありますが、それは違います。岡本太郎の作品と云えば、日本万国博覧会の太陽の塔などがあるが、岡本太郎の作品が本当にメチャクチャをやった結果だったのかというと違うのです。

例えば、メチャクチャにいろいろな色で描いてみると、一枚目は充実感があると思います。ただ、それを何回も繰り返していくと、表現が変わっても全て同じだということにやがて気づくと思うのです。人間の体の動かし方はある程度決まっています。関節があって、動かし方には習慣もある。メチャクチャにやっても習慣から逃れることはできない。メチャクチャにやっても、実は中身は同じで、すぐに面白くなくなってしまう。結局、メチャクチャは何も新しいものを生み出さない。要するに、メチャクチャにしているつもりでも習慣や言葉、文化の規範にとらわれている。本当に「表現する」ということは、新しい発見を伴うものです。違うものを作り出すこと。「新しい表現をつくる」ためには、習慣や思い込みから外へ出るための方法が必要になる。それを見つけ出すことが一番大事なことなのです。

私は、硯というよりは彫刻のようなデザインの作品をつくっていますが、まず「こんな作品にしたい」というイメージがある。それを実現できる原石を探してくる。原石は天然のものだから自分の思い通りにはならない。どうしたらイメージに近づけることが出来るかと試行錯誤する。だんだん原石の中に自分のイメージを見つけていく。集中している時間は頭で考えているようには感じられない。勝手に手が動くという感じです。そんな中で天から何かが降りてくるという瞬間がある。どうしてそのようなことが起こるかというと、絶えず絶えず、培ってきたものが体にしみ込んでいる。考えなくても判断できるような感覚が備わってくる。そのようなときに自分でも思いもつかないものが…本当に天から降りてくるとしか言いようがないのですが、作品の中に加わってくる。僕としては、「制作する」ということはその瞬間を捕まえることだと考えています。決められたように設計図を書いて、こういうようにつくっていく…ということではなく、イメージを追求する中で、素材という自然と自分とが一体となり、いわば自分を超えたものが降りてきて、作品の重要な要素となっていく。スポーツでもイメージトレーニングをしながら基本動作をくり返す練習を行なうかと思いま

す。これは体に覚え込ませるということだと思います。それがプレーをしているときに活きる。ベストプレーをするときは、おそらく考えるより先に体が動いているのだと思う。いちいち考えていたら、瞬間のプレーには間に合わないですよね。そういうことが出来るまで、練習で体に覚え込ませていくでしょう。実は大学時代、ラグビー部でした。入学するときに悪い先輩に強引に引き込まれて弱小チームでラグビーをしていました。おかげで人前でも話せるようになったのですが、日々のシンプルな練習の中で、いいプレーができる瞬間は何かが降りてきてできるってことが確かにあると思う。「考えなくてもできる」という瞬間です。

先程、宮島同窓会会長から『読書力』という本の紹介もありましたが、読書することで知識の基礎体力がついて、いざというときに役に立つようになる…というのも同じでしょう。

中学校で話をさせていただいた際に「ベストプレイがでる時は頭で考えるより先に身体が動くよね」と話したところ、近くにいた先生が「ちゃんと考えているよね。」と近くの生徒につぶやいているのが耳に入りました。「きちんと考えるからいい結果が生まれる。」当然です。確かにその通りです。しかし、その上で、頭で考える以上の結果を得るためにできることがあるということなのだと思います。

意識されなくても「考えない」ですむ事があるおかげで、より深く考える事ができます。例えば椅子に座るときに「椅子とは何だ。目の前の物体は本当に腰をおろす道具なのか」と検討することはしません。椅子に思考をめぐらせることがないからこそスムーズに座ることができる。思考のショートカットを行なうことでより高次の思考ができる。しかし、その「考えない領域」も時代や場所によって変わる。同じものでも担う意味が変化します。

その硬直した思い込みに疑問を持ち新しい視点で見つめなおすことが〝芸術〟の役割りでもあるのです。

さて、誰もが認める名画はなぜ名画なのか、なぜ名著は名著とよばれるのか、全ての人が同じものを全く同じように見ているわけではありません。ものの見方は人によって全く異なっています。極論を言ってしまえば、皆、見たいものを観ている。読みたいものを読んでいる。一枚の素晴らしい絵も、その絵が与えてくれるものはその人のレベルにあったものしか与えてくれない。差別的な言い方に聞こえたら失礼だが、10価値あるものも2のものしか見えない人には2しか見えない。経験を積み、物を観る目を積んで、知的能力が挙がってくると3のもの、4のものが見えてくる。私はそう思います。

経験を積むと、より深いものが見えてくる。だから、名著といわれるものは何回読んでも面白い。20歳に読んでも、30・40歳になっても、絶えず新しい発見があり、新しいものを与えてくれる。いくら自分の見る目や価値観が上がっても更に与えてくれるものがある。

名画や名著は永い時間をかけて選ばれてきた。優れたものにふれるにはそれにふさわしい感受性を得る必要がある。気に入ったら何回も手にしてみる。飽きてしまうものは、それだけのもの。何回読んでも何回観ても更に素晴らしい。それが古典であり、名品です。

新しい視点で表現されるのが「芸術」ならそれはあたりまえの言語表現では表わすことができません。その表現を受けとめるためには、たえず自分自身を高めていくことが大切です。そして新たな視点で見る世界は大きな知的喜びを与えてくれるはずです。

私は長い間、芸術は自分の外にあって、修練することによって近づいていくもの…と思っていました。しかし、実は「芸術は自分の中」にある。そのことに気づかせてくれたのは、アメリカの作曲家、ジョン・ケージの4分33秒という作品でした。この作品はピアノの前で演奏者が4分33秒の間、何もしない。という曲です。この

作品を知ってから「コンサート会場で何も演奏されなかったことに何の意味があるのか」「そこに音楽はなかったのか」…と、いろいろ考えました。その会場には風の音だったり、鳥の音だったり、車の音だったり、座席のきしむ音だったり、ざわめきだったり、…何も演奏されなくても音はあった。私の関心は、「音はどこから音楽になるか」ということでした。楽器を演奏したり、歌を歌うことによって音楽が生まれる以前に「音にどのように向き合うのか」によって音楽は生まれるのです。

風や波の音も美しいと思えば、それは音楽になる。美術も同じで「自分が世界にどう向き合うのか」によって「芸術」が生まれるのではないでしょうか。

芸術は外にあって追いかけるものではなく、「自分の中の世界を見る目を育てあげること」にこそあるのだと思います。その上で芸術作品を創作する意味を考えると、見る人に働きかけて、創造性を刺激して気づかせてあげることが作品にとって大切なことだと思うのです。

その気づきが私にとっては画期的なことでした。「全ての人は芸術家である」と多くの人が言っていますが、これは、絵を描いたり音楽を奏でたり、詩を書いたりしなくてはいけないということではなく、全ての人の中の創造性に関することだと思います。人間には創造性がある。

作品を制作する行為は、いってみれば、ひとつの「労働」です。1つの行為のくり返しの中に創造性が降りてくるということは、何も芸術作品に限らず、日常の労働の中でも生じることです。1つの仕事を追求する中に新しい発見があり創造性が生まれる。ひとりひとりの人々の創造性が発揮される社会は豊かな社会につながって行くでしょう。

ヨーゼフ・ボイスという作家は、自分の作品によって人々を触発し、人々が創造的となり、豊かな社会をつくり出して行く過程を「社会を彫刻する」と表現しました。

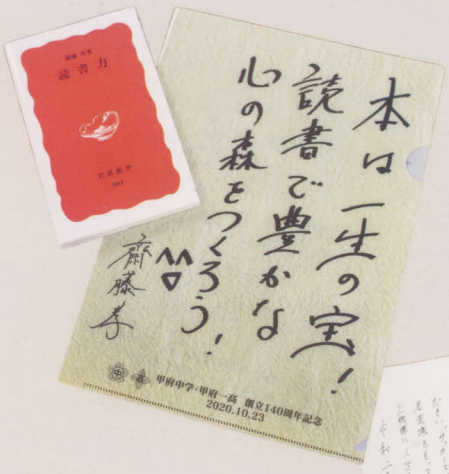
芸術とも呼ばれる「創造性」は実はすべての皆さんの中にある。これからの新しい社会の変化に柔軟な新たな視点で向き合って欲しい。これからの時代をつくるのは若い皆さんです。自分の内なる創造性を育て、発揮して豊かな社会を築いていただきたいと思います。

硯は墨をするだけではなく、気持ちを落ち着け、創造性を花開かせるための道具だと、私は思っています。私は、硯で皆さんの創造性を刺激して、日本の文化に陰ながら貢献したいという使命感を持っています。皆さんも自分の核となる価値観を見つけて、とことん取り組むことで日本の未来をつくってもらいたいと思います。

御清聴ありがとうございました。

山梨県立甲府第一高等学校創立140周年
記念事業寄贈品紹介

生徒・教職員



齋藤孝著『読書力』（岩波新書）
齋藤孝氏直筆クリアファイル

学　　校

パソコン・スクリーン・
プロジェクター及びケース

ワゴン車

特集Ⅱ

この10年

SINCE 1880 140th

平成23(2011)年3月11日　14時46分18秒

東北地方太平洋沖地震が発生し、最大遡上高40.1mに及ぶ巨大な津波が東北地方から関東地方の太平洋沿岸部を襲い、各地に壊滅的な被害をもたらした。

この日、県内の公立高等学校では11時に高校入試合格発表を行い、その後に受検生の開示請求に応えた。大きな揺れを感じたのは、おそらく各校で、合格発表に関係する様々な業務を終えて、ようやく職員室で一息を入れたころだったのではないだろうか。その後、テレビを通じて、我々の目に飛び込んできた光景は、今でも脳裏に焼き付いている。

令和2年度在校生にとっては、小学校低学年や幼稚園年長組に在籍していたころだろう。

直後に起こった福島第一原子力発電所事故に端を発して、計画停電が行われたことを覚えているだろうか。各家庭、山の手通りや武田通り、各所の自動販売機の照明が消えた光景は、まさに非常事態だった。

この年の夏、インターハイは青森県と岩手県で開催され、本校からは男子テニス部、アーチェリー部、柔道部が出場した。試合を終えた男子テニス部16名と新聞部5名、女子生徒2名は、創立130周年記念事業「日新基金」の支援を得て、宮城県南三陸町で被災地救援活動に携わった。

また10月に校内で開催された「甲府第一美術館」では、現代美術家の浅川洋氏によって、福島原発に関連した作品「大型インスタレーション」が発表された。

大型インスタレーション

伝統の「強行遠足」を繋ぐ・・・

本校の伝統行事である強行遠足は、平成24(2012)年以来2年をかけて、男女の最終到達地点をそれぞれ「小諸」「小海」に戻した。それぞれのコースを復活させるについては、生徒や教職員の思いはもちろん、関係各所や同窓会の理解と協力なくしては実現しえなかったと感じる。この場を借りて深甚の謝意をお伝えしたいところである。

第93回大会は、令和元年に台風19号の直撃によって中止され、創立140周年を迎えた令和2年には新型コロナウイルス感染症拡大を受けて、感染症防止対策に万全を期す中で県内一日コースとして実施した。

大正13(1924)年の第1回以来90回を越える伝統を有し、本校に学んだ者が卒業後も自らの支えとしている、この強行遠足は今後も長く後輩に経験してもらいたいと願う。本校では保護者の皆さんや同窓会の協力を得て、この稀有な行事を大切に時代へ「繋」ぎたい。

強行遠足・最近10年の記録

年号(西暦)	回	コース概要
平成23(2011)年	第85回	男子(学校－小海74.8km)、女子(須玉－野辺山30.0km)
平成24(2012)年	第86回	女子コースを高根－小海(43.2km)に変更(女子小海復活)
平成25(2013)年	第87回	男子コースを学校－小諸(105.7km)に変更(男子小諸復活)
平成28(2016)年	第90回	男子最終到達地点を小諸市保健センターから懐古園に変更
令和 元(2019)年		台風19号の直撃により中止
令和 2(2020)年	第93回	新型コロナウイルス感染症拡大を受けて県内一日コースで実施

激勵の辭

前甲府中學校長　江口俊博

本日は記念日にておめでたう存じます。(中略)人間は随分ツムジ曲りでヤレば出来ることは打捨てゝ容易に出来そうにない事に無駄骨を折つて居る傾向が仲々あります。(中略)私が甲府中學校に赴任したのは大正一二年即ち関東大震災の時でした。電車や何かに乗り慣れて居た東京人士が突然足を奪はれてドノ位迷惑したかの實状を聞かされた私は歩くことの必要を一入痛感したのです。(中略)歩けば歩く程に粘り氣が出てくるのを感じつゝあつた際のこと故大震災の此話を聞いたとき、一入歩く教育をして置く必要を感じ先生方の御同意を得て強行遠足を実施した次第です。(中略)歩く程平凡な事はない。誰だつて出来る。従て藝當をやつた感じがしない。多くの人はドウモ藝當がしたい。人目に立つことがして見たい。併し藝當が手に入るのは容易のことではない。従て誰にもと云ふわけには行き兼る。それを多くの人が藝當を心掛けては物にならずに無駄骨を折り苦む。「小人は人目に立つべき大善ならばせんと思ひて小善を目にもかけず、君子は小善を積んで徳を為す。徳は美の淵源なり。徳あれば無心にして美限りなし」という蕃山先生の名句に鼓舞されて、壮年時に横超した私は雀百まで踊り忘れず、雄大高遠の論理よりも目前身近の始末を忽にしない行き方に曳きつけられた。(後略)。

(原文ママ)

これは『強行遠足二十周年記念誌』に寄せられた、この行事の創設者である江口俊博先生の言葉である。ここに強行遠足の意味が大切に表現されている。

各地到着者数の記録(男子)

西暦	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019		2020
年度	平成23	平成24	平成25	平成26	平成27	平成28	平成29	平成30	令和元年		令和2年
回数	第85回	第86回	第87回	第88回	第89回	第90回	第91回	第92回			第93回
韮崎	1	4	4	4	2	0	3	1	荒天中止(台風19号東信地区直撃)	韮崎	1
中田	—	—	—	—	—	—	—	—		中田	—
須玉	10	10	4	3	4	11	10	7		須玉	3
高根	32	21	7	8	20	4	15	12		高根	9
若林	—	—	—	—	—	—	—	—		若林	—
大泉	55	34	47	32	39	42	43	47		大泉	8
まきば	—	—	—	—	—	—	—	—		まきば	338
清里	—	—	—	—	—	—	—	—			
野辺山	25	34	57	37	36	36	44	74			
海ノ口	4	4	54	41	30	28	17	32			
小海	**238**	**276**	4	15	13	14	9	5			
佐久穂			15	26	—	1	3	1			
臼田			—	—	6	11	11	10			
中込			1	3	—	8	5	4			
岩村田			—	—	1	2	0	0			
三岡			—	—	—	0	0	0			
小諸			**178**	**193**	**214**	**225**	**233**	**186**			
在籍者数(人)	404	397	380	374	378	395	401	396			368
到達率(%)	**65.0**	**72.1**	**47.8**	**53.2**	**58.6**	**58.9**	**59.3**	**49.1**			**94.2**
総走行距離(km)	22,863	25,036	29,234	30,089	30,410	31,843	32,313	29,290			15,478
実施距離(km)	74.8	74.8	105.7	105.1	105.7	103.5	104.0	104.0			43.8

各地到着者数の記録(女子)

西暦	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019		2020
年度	平成23	平成24	平成25	平成26	平成27	平成28	平成29	平成30	令和元年		令和2年
回数	第85回	第86回	第87回	第88回	第89回	第90回	第91回	第92回			第93回
高根	1	2	4	荒天中止	3	6	1	6	荒天中止(台風19号東信地区直撃)	学校出発	
若林	—	—	—		—	—	—	—		韮崎	1
大泉	3	6	18		13	19	27	8		中田	—
まきば	—	—	—		—	—	—	—		須玉	14
清里	—	—	—		—	—	—	—		高根	**389**
野辺山	**403**	28	26		10	34	15	16			
海ノ口		38	13		16	73	7	4			
小海		**341**	**366**		**379**	**281**	**366**	**388**			
在籍者数(人)	423	433	441		441	422	425	431			412
到達率(%)	**99.0**	**82.2**	**85.7**		**90.0**	**68.0**	**88.0**	**91.9**			**96.3**
総走行距離(km)	12,146	16,671	16,975		17,238	14,928	15,993	16,676			12,393
実施距離(km)	30.0	43.2	43.2		43.2	41.6	41.6	41.6			31.0

創立130周年記念事業「日新基金」の活動

平成22(2010)年に創立130周年を迎えた本校では、同窓会の厚意により「日新基金」を開設した。これは、個性的で創造性に富み、卓越した指導力を持つ生徒の育成を目的として、自主的に企画された活動に対して同窓会から総額100万円の活動資金を給付するものである。

平成23(2011)年から10年間の活動の軌跡は、次のとおりである。

年度	事業	活動主体
平成22年度	IMF・世界銀行視察(アメリカ合衆国)	有志
平成23年度	がんばろうニッポン！テニス部プロジェクト(岩手県・福島県)	テニス部
平成24年度	一高バイオサイエンスレクチャー	理系有志
平成25年度	歌の架け橋(アメリカ合衆国)	ア・カペラ部
平成26年度	はじめまして　先輩！(東京都)	有志
	一高の歴史を綴る～「甲府一高新聞」縮刷版の制作～	新聞部
平成27年度	旅する一美～上海アート研修～(上海)	美術部
平成28年度	茶道の心を巡る(京都府)	茶道部
平成29年度	＜該当者なし＞	
平成30年度	ROAD TO TOKYO2020 PROJECT(トライアスロン大会各所)	個人
	笑顔と元気を届けよう(熊本県)	生徒自治会
	Mission 0 ～Objective～(愛知県他)	家庭クラブ
令和元年度	外国語で地域活性化を目指せ(台湾)	探究科
	気づき、学ぼう、平和な日常のすばらしさ(広島県)	有志
令和 2年度	＜新型コロナウイルス感染拡大を受けて見送り＞	

なお、創立140周年記念事業によって「日新基金」の継続が決定されている。

H28 日新基金

R1 日新基金

H30 日新基金

制服にみる「不易と流行」

平成28年度より本校では、制服のオプションとして、男女ともにポロシャツと女子のセーターを導入した。導入から5年が経過した今、夏には男女ともにほぼ全員がポロシャツを着用している。ポロシャツの左胸には、本校の校是の一つである「Boys be Ambitious!」で有名なクラーク博士（羊ケ丘のクラーク博士像のシルエット）が刺繍されている。

女子のセーターは、紺地に赤いラインが入ったデザインで、冬の制服によく似合う。

一高BRAND

制服は本校のブランドの一つだと感じる。

昭和25（1950）年に、県下でいち早く男女共学が実施された際、本校女子の制服をデザインしたのが当時、本校家庭科教諭として着任した川久保欽子先生であったとされている。川久保先生は、構想する制服のイメージを、本校美術教諭で著名な芸術家でもあった須藤獏先生に作画してもらい、数か月を経てデザインを決定していった。

背中がVにカットされた太い吊は、肩からずれ落ちにくい。

蝶ネクタイは、棒ネクタイのように前に垂れて邪魔にならない。

スカートには、当時としては珍しいプリーツ（襞、ひだ）を施した。中央から両方向に折り目が付いているボックスプリーツ（箱襞）とよばれるもので、当時、これを「追っかけ襞」とよんだらしい。

この「追っかけ襞」を採用したことについては、前にいる人を「追っかける」ことで皆が良くなっていくことを願ったという制作者の意図があったのだとか…。

制服に込められた意味を知って、これも本校のブランドだと、思いを新たにしてほしい。

因みに、制服について様々な意見も耳にするが、そのうちの一つに「リボンが小さい」という声。しかし、本校の場合は、リボンではなく「蝶ネクタイ」。「蝶ネクタイ」なので大きいはずがありません。

英語科から探究科へ・・・

本校では平成2年度に「英語科」を開設し、四半世紀の歴史を紡いで、平成28年度には「英語科」の募集停止に伴い、新たに「探究科」を設置した。

探究科は、英語科で培った英語教育の経験をもって、探究活動を通じて「グローバル人材」を育成することを目的としている。

おりしも学科改編の時期であった平成26年度から5年間、本校は文部科学省のスーパー・グローバル・ハイスクール（SGH）事業の指定を受けた。この間、英語科は開設25年間の歴史に幕を閉じ、平成30年3月に最後の卒業生を送り出した。そして、英語科25期生の卒業を見送った探究科1期生が平成31年3月に本校を巣立っていった。

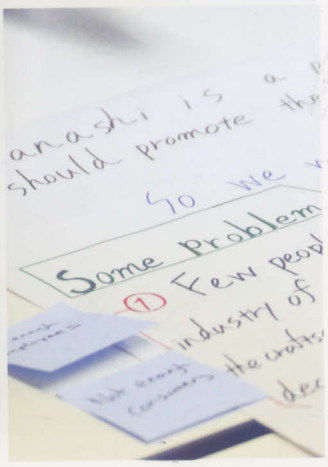
SGH事業の指定が終了した直後の平成31年度（令和元年度）、本校はSGH後継事業にあたる「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」において地域魅力型のアソシエイト校となり、令和2年度から3年間を目途に、同事業のグローカル型で正式な指定を受けた。

「やまなし創世に資するグローカル人材の育成」を旗印に、地域課題から広く日本、そして世界に対する広い視野を持った若者が本校から育っていく。

英語科25期生

英語科での3年間は非常に中身の濃い、充実した時間でした。もちろん、英語に触れる機会はたくさんありましたが、私が学んだことは決してそれだけではありません。自分の個性を生かし、個人としても集団としても成長できる場所、それが英語科であったと私は思います。もう英語科の後輩ができないのは少し寂しいですが、探究科の後輩たちが伝統を受け継ぎ、より良いものにしていってくれることを願っています。

最後になりましたが、この3年間を共にした仲間や先生方、お世話になった方々、そして25年間にわたり英語科のバトンを受け継いできてくださった先輩の皆さんに感謝と敬意を持ち、甲府一高英語科の名に恥じぬよう、これからも精進致します。



部活動の10年

「文化の香りがする懐の深い進学校」を自負する本校では、課外活動が盛んに行われ、その成果も目覚ましい。その一つ一つを紹介しきれないが、この10年間に全国大会に名乗りを上げた各部の紹介をしたい。

体育局

全国高等学校体育大会（インターハイ）出場

男子テニス部、柔道部、アーチェリー部、水泳部、スケート部、山岳部、弓道部、空手部

平成23年　第66回国民体育大会（山口県）出場

少年女子アーチェリー団体25年ぶりの優勝（本校生徒1名　永田）

文化部

全国高等学校総合文化祭出場

美術部、新聞部、文学部、ア・カペラ部、放送部、弦楽部、箏曲部、書道部、囲碁将棋部、應援團吹奏楽部

100年目の感染症騒動

2019年12月に中華人民共和国湖北省武漢市で初めて検出された新型感染症は、その後、世界各地に広がり、未だに終息する気配を見せない。

当初、新型肺炎といわれていた新型コロナウイルス感染症は、日本で令和2年1月15日に初めて感染者が確認されて以来、令和3年2月12日現在で409,564人が罹患し、6,772人が亡くなっている。

令和2年2月下旬に安倍晋三内閣総理大臣（当時）が、全国の学校に対して臨時休校を要請したことを受け、山梨県でも3月3日から臨時休校措置がとられた。

本校においては、3月3日午後から臨時休校措置に入ったものの、終業式・離任式は時間短縮等に配慮しながら実施した。しかし、その後、4月に入って全国的に緊急事態宣言が発令されるに至り、令和2年度入学生は入学式も行われず、入学当初に行う様々な行事も棚上げされた状態で新年度を迎えた。

新入生に関する行事だけではない。6月の一高祭、今年度に本校を会場として開催する予定であった「日本生活科・総合的学習教育学会全国大会・山梨大会」は11月にリモート開催になった。

一日も早く、日常生活が戻ってくることを期待したい。

スペイン風邪

今を遡ること100年前にも全世界に被害を与えた「スペイン風邪」という感染症があった。これは、いわゆるインフルエンザであるが、全世界で約6億人が罹患し、2000～4000万人が死亡したといわれている。日本においても大きな被害があり、『流行性感冒』（内務省）によると1918年から1920年の間に3度にわたる大流行期があり、全国で約2380万人が罹患し、そのうちの約38万人が亡くなった。山梨県においては、27万人余りが罹患して、5135人が死亡している。県内の罹患者については、当時の山梨県人口から考えると半数近くの人々が罹患したことになり、このときの被害の大きさがわかる。

特集Ⅲ

一高の至宝

校　章

「桜花」から「ヤマナシ」へ

本校の校章には、いくつかの変遷がある。古くは帽章として明治20(1887)年に「徽」の文字を用いたという記録があるが、その後、明治24(1891)年には桜花の中心に「中」の文字を入れた校章になったようである。桜花をかたどった校章にも多少の変遷があるようだが、明治39(1906)年の校旗樹立式までに写真に示した形の校章となった。

その後、新制高校における校章募集に際して、当時の在学生であった輿水進氏(昭和25年卒)が、「桜花」につきまとっていた予科練や狭い国家主義のイメージを払拭し、荒れ果てた日本を何とかしなければならないとの思いから、現在の校章の図案を作成した。

現在の校章は、「桜花」のイメージを残して、桜と同じバラ科の、花の咲く木として「ヤマナシ」の別名をもつオオズミを意匠として用いた。この葉を十字に重ねて、中心に「高」の字を置いたことについては、「占領軍による教育改革が進む中で、キリスト教の博愛主義に共感したところから十字架のイメージを葉の組合せに活かした。」とされている。

校歌にみる思い

山梨縣立甲府中學校　校歌

作詞：三井　甲之
作曲：東京高等音楽學院

1. 我等は日本に生まれたり
神の御代より一系の
皇統戴く我國に
生まれしことのうれしさよ
皇國の榮えは天地に
共に窮りなかるべし

2. 大和島根に山めぐる
甲斐の國あり水清き
郷土の歴史顧みよ
我等の努め輕からず
見よや南に富士ヶ嶺は
皇國の鎭めと聳えたり

3. 大海原の搖りやまぬ
波をも風をも凌ぎつつ
護れ皇國を諸共に
國民學りて國のため
撓まず萎縮まず辟易がず
進むぞ大和ごころなる

山梨県立甲府第一高等学校　校歌

作詞：上条　馨
作曲：小松　清

1. 甲斐の國　み中に建ちて
古へゆ　雄心つたへ
新しき　世の鑑とし
勉めてむ　この學びやに

2. 日に新た　また日に新た
いや高き　のぞみをもちて
眞なる　理きはめ
勵みなむ　若人われら

3. 聳えたつ　芙蓉のたかね
清きかな　甲斐の山川
もろともに　玉と磨きて
贊くべし　天地の化育

旧制中学時代の校歌は、昭和3(1928)年2月20日に制定された。作詞者の三井甲之は松島村(現・甲斐市)の出身で、本校に生徒として在籍したことがある、歌人であり、国家主義思想家である。作曲者は当時の慣習にならって名が伏せられ、東京高等音楽学院となっているが、『創立百二十周年記念誌』では、同学院の当時のピアノ教授である榊原直氏が作曲したとしている。

昭和3年以前にも別の校歌の存在は考えられるが、それについては不明である。

昭和23(1948)年に学制改革によって新制高校が開設されると、校歌改編についても議論が生まれた。その結果、誕生したのが現在の校歌である。

本校の校歌を作詞した上条馨氏は、その著書『甲州風物詩』の中に、「校歌発表のあいさつ」を載せている。この中には本校に対して、次のような言葉が贈られている。

> (前略)時代のうつりかわるにしたがって、この学園にも幾多の変化がありました。しかしいかなる時代においても、いかなる事態にあっても、どっしりした学問の真理と精神とをきわめ、堂々とそれをもちこたえ、足を大地につけ、ある時は、常に時代に先んずるの積極性をもつとともに、ある時は、時代の濁流を敢然とわが胸にうけとめ、時代を覚醒する気慨があってほしいのであります。
>
> 願わくは諸君、いよいよ諸君の学徳をみがき、教養と人格をたかめられんことを。母校を愛し、母校をして、いよいよ栄えあらしめよ。私のあいさつを終わります。

昭和23年7月20日、旧制中学時代に代わる新校歌募集の要項が発表された際、卒業生であり、本校教員でもある氏は「本校にふさわしい立派な校歌を作りたい」と考えた。作詞に当たっては、入選の如何を問わず、母校の役に立ちたいという思いから、その年の夏休みの大半を校歌作制に傾け、自分の心を清く気高く、雄々しく保つために、まず生徒とともに何日もかけて南アルプスの鳳凰山への登山、北アルプスの縦走を試み、山の霊気に触れた。しかし、なかなか詞がまとまらずに苦しんだが、8月27日の夜に「一度床について間もなく、次々に詞が浮かんで」、全体の構想ができあがり、その後、何度も推敲を重ねて、この校歌に至ったということを、校歌発表の挨拶の際に回想している。

校歌の意味について、氏は次のように語っている。

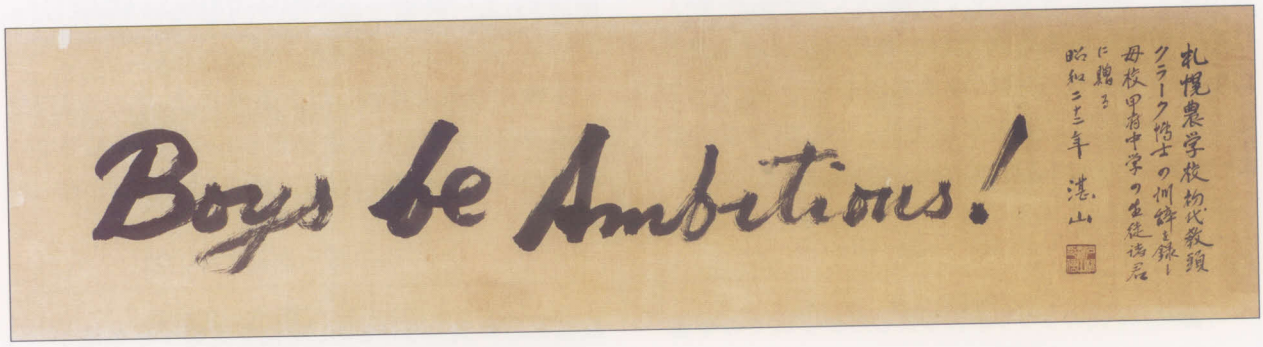
> この甲斐の国の中心に位している我が校は、その創立の昔から、雄壮剛健の気風をうけつたえて、今この新しい世に際会しては、この世を照し正すかがみともなるよう大いに奮励努力しよう。この栄ある学舎において。
>
> 日に新た又日に新たというのは、学徳を日々に新たに進め、という意味でありまして、本校の号鐘の日新鐘とおなじ由来によるものであります。出典は大学であります「湯ノ盤ノ銘ニ曰ク、苟ニ日ニ新タ、日ニ日ニ新タ、又日ニ新タナルト」とあります。そうした高い理想と希望とをもって、というのが「いや高きのぞみをもちて」でありますが、この一句によって、諸君は本校の第六代校長の大島正健先生が、札幌農学校において、クラーク博士からうけつたえた、あの「青年よ大志を抱け」の言葉を思いおこすでありましょう。この一句にはそういう意味がふくまれているのであります。かくして学術の真理を究め、大いに励んで行こう。我ら若人達よ。
>
> おごそかに聳え立っている富士山や、清い甲斐の山や川の精をうけて、もろともに切磋琢磨し、天地自然のめぐみ、人間の本性をたすけをのばして行こう。この贊天地之化育の文句は、本校玄関にある銘文でありまして、中庸の中にあります。
>
> (原文ママ)

因みに、現在の校歌の作曲者は、旧制東京高等学校音楽科教授の小松清氏である。

本校校歌は、清々しく気高く雄々しい。このことは卒業してから年を追うごとに改めて感じる。校歌制定までの経緯やそこに込められた思いを知ると、校歌に対する愛着が深まる。

校是に込められた本校の理想

Boys be Ambitious!



「Boys be Ambitious!」…この言葉が本校に伝わるのは、クラーク博士から直接この言葉を聞いた札幌農学校1期生の中に、後の本校第7代校長・大島正健先生がいたからである。大島校長は「クラーク先生」(『中等國語二』昭和22年・文部省)の中で、この言葉について次のように紹介している。

「明治十年四月十六日、日本政府との契約期限が満ちたクラーク先生は、再びマサチューセッツ農学校校長の職につかんがため、うしろ髪を引かるる思いで札幌を辞し、室蘭経由で帰国の途につくことになった。その朝、なごりを惜しむ職員学生一同は、先生の官舎であった創成橋畔の開拓使本陣前に勢ぞろいをして記念撮影をなし、思い思いにうまにうち乗り、いずくまでもと恩師のあとを追って行った。(中略)先生を囲んで別れがたなの物語にふけっている教え子の顔をのぞきこんで、ひとりひとり力強い握手をかわし、『どうか一枚のはがきでもよいから時おり消息を聞かせてほしい。ではいよいよお別れじゃ。元氣で常に祈ることを忘れないように。』と力強い口調で別辞を述べ、ひらりとうまにまたがると同時に、Boys, be ambitious!と叱呼して長鞭をうちふるい、振り返り振り返り、雪泥をけ立てて疎林のかなたにその姿をかき消された。

島松駅頭クラーク先生の残されたそのことばは、簡單ではあるが、意は実に深いのである。青年よ、なんじらは常に大志を抱き、奮起してすべからく功名を立てよ、小成に安んぜず、力の限りを盡くして向上発達をはかり、もって國のために盡くす有用の材たれよ、と訓えられたのであるが、近時無知な人々がこの句を誤訳して、『青年よ野心家たれ。』といっているのを一再ならず耳にする。当たらざるのはなはだしきものである。」

掲載したのは、石橋湛山(明治35年卒)の書(額装。縦33cm・横131cm。)で、校長室に掲額してあるもの。視聴覚教室には複写版が掲額されている。

「Boys be Ambitious!」の揮毫の右側には「札幌農学校初代教頭クラーク博士の訓示を録し、母校甲府中学の生徒諸君に贈る　昭和二十二年　湛山」と署名がある。校歌二番の一節にある「いや高きのぞみをもちて」はこの「Boys be Ambitious!」の意味するところをよんだものとされる。

column 校　是

本校には「校訓」とよばれるものはなく「校是」という。「Boys be Ambitious!」「苟日新又日新日日新(苟に日に新た、また日に新た、日に日に新た)」「贊天地之化育(天地の化育を贊くべし)」である。

「Boys be Ambitious!」は、札幌農学校のクラーク博士の言葉を第7代校長・大島正健先生が本校に伝えたもの、「苟日新日日新又日新」は『大學』の一節で、第10代校長・江口俊博先生が唱えた。江口校長はこれに因んで大正末に「日新鐘」を鋳造した。また「贊天地之化育」は『中庸』朱子章句の一節で、これも第10代校長・江口俊博先生が唱えたもので、本校が現在地に移転した折に新校舎の正面玄関に「贊天地之化育」を掲げた。

これらは古くから在校生の知る言葉であり、本校の大切にしてきた言葉であるが、古い記録にこれらの言葉が校訓なり校是なりとして挙げられたことがなく、平成2年度『学校要覧』から「校是」として掲載されている。いずれも校歌の歌詞にも反映されている言葉であるので、どれも本校の目指すところであるが、「校是」としての歴史は意外に新しい。

苟日新　日日新　又日新

「苟日新　日日新　又日新（苟（まこと）に日に新た　日に日に新た　また日に新た）」は『大學』の中の一節である。本校第10代校長・江口俊博先生が紹介したもので、江口校長はこの言葉に因んで、日新鐘（高さ60cm・外径40cm）を鋳造した。『校友会雑誌53号』には「大正丙寅秋我が学舎に鐘生まれ日新と銘うてる」とあることから、大正15（1926）年に鋳造されたことがわかる。本校が現在地に移転する2年前、旧甲府城内の校舎で鳴らされた。

現在地の旧校舎では、本館屋上の北面に鐘が吊られており、そこから一階に紐が下がっていた。古くは時制の鐘（現在のチャイム）として用いられたものであろうが、時代とともに本校のシンボルの一つとなっていった。いつのころからか、卒業式の日に母校を巣立つ生徒たちが、この鐘を鳴らして出ていくのが本校の風物詩になっている。筆者は在学中に「鳴らしたら退学」と聞いたが、少し違うらしい。正しくは「鳴らすのは本校を巣立つとき」なのだろう。

現在はアトリウム東壁に吊られている。校歌二番の「日に新たまた日に新た」は、まさにこの言葉に因む。

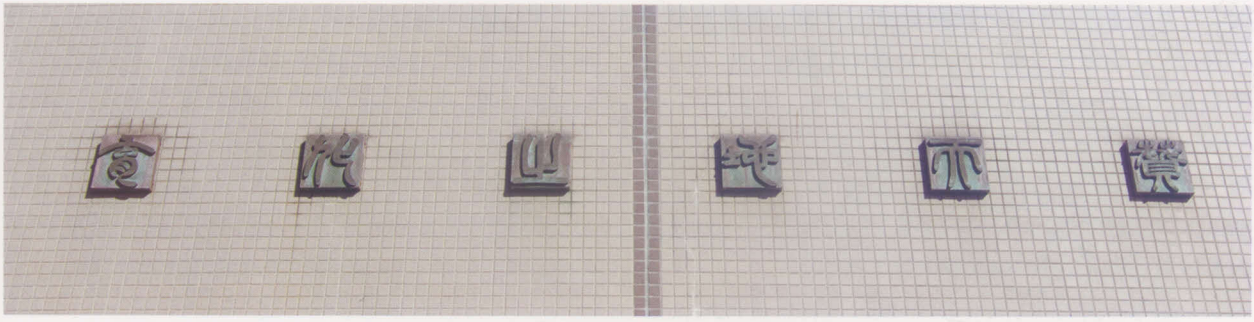
贊天地之化育

「天地の化育を贊（たす）く」と読む。

原典は「唯天下至誠、為能尽其性。能尽其性、則能尽人之性。能尽人之性、則能尽物之性。能尽物之性、則可以贊天地之化育。可以贊天地之化育、則可以与天地参矣。（唯（ただ）天下の至誠、よくその性を尽くすことを為す。よくその性を尽くせば、則ちよく人の性を尽くす。よく人の性を尽くせば、則ちよく物の性を尽くす。よく物の性を尽くせば、則ち以て天地の化育を贊すべし。以て天地の化育を贊すべければ、則ち以て天地と参すべし。）」とある。

意味するところは「世の中において誠の徳を究極的に体現した聖人は、万物の根源にある本質を理解して、それを大切にできる。自分の存在を大切にできる者は、他者を大切にすることができる。他者を大切にできれば、物を大切にできる。物を大切にできれば、生きとし生けるものを生み出し、育てていく、この世の中の働きを助け、進めていくことができる。そうすれば天・地・人が均衡して本当に良い世の中をつくることができる。」ということにでもなろうか。

昭和3（1928）年、現在地に校舎が建設された折に、当時の校長（第10代）であった江口俊博先生が『中庸』朱子章句より「贊天地之化育」の6文字を選定して、正面玄関上部に設置した（篆刻）。校歌三番の最終節は、本校が掲げる究極の理想を歌い上げていると言えよう。



一高生に語りかける至宝たち

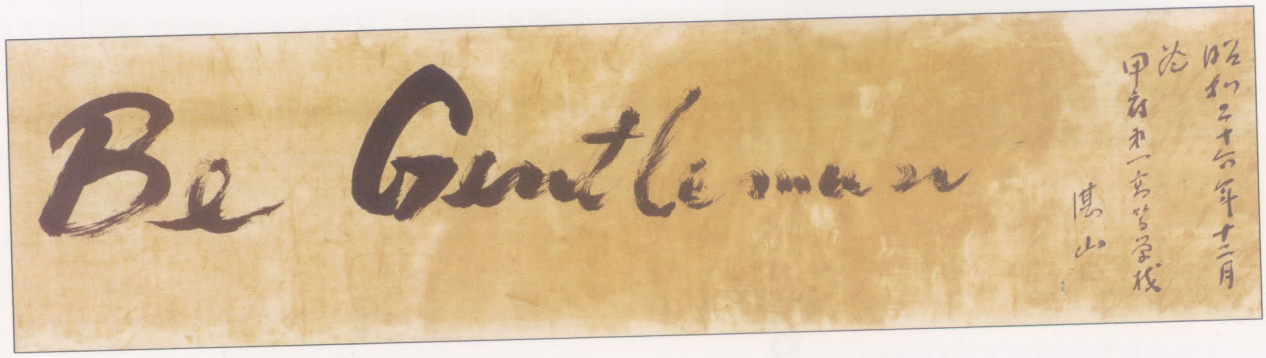
石橋湛山から贈られた書

石橋湛山（明治35年卒）の本校卒業時の名は省三。戦前はジャーナリストとして、戦後は政治家として自由民主党総裁、内閣総理大臣を歴任した。本校在学中に2度留年したことで、第7代校長・大島正健先生と出会う。札幌農学校第1期生として、クラーク博士の薫陶を直接受けた大島校長の教えは、その後の石橋湛山の人生に大きな影響を及ぼしたと言える。

石橋は、日蓮宗の僧籍をもち、立正大学第16代学長を16年間も務めた。

本校に残されている石橋の書からは、世に知られる高潔な政治家としての石橋ばかりではなく、教育者・宗教者としての一面も知ることができる。

Be Gentleman



書。額装。縦33cm・横133cm。視聴覚教室北側入口に掲額。

揮毫の右には「昭和二十六年十二月　甲府第一高等学校のために　湛山」とある。

「Boys be Ambitious!」と同様に、この言葉も札幌農学校のクラーク博士の有名な言葉である。

この「Be gentleman」という言葉を本校に伝えたのも第7第校長・大島正健先生である。大島校長は「クラーク先生」（『中等國語二』昭和22年・文部省）で、この言葉についても触れている。

「さて札幌農学校がいよいよ開校になって、その学則をいかに定めるかということが問題になった際、札幌学校から移って來た生徒たちが、参考のためということで札幌学校の規則書を持ち出し、第一條何々、第二條何々とその大要を英訳して、クラーク先生の前で読みあげた。聞きおわったクラーク先生は、「そのようなことで人間がつくれるものか。」と大声で怒号し、『予がこの学校に望む規則は、Be gentleman! たゞこの一言に盡きる。』と言って、特徴のある太いまゆをぴくりと動かされた。

学校は学ぶ所であるから、起床の鐘が鳴ったら、寝床をけって起きなければいけない。食卓へつく時にはあいずをするから、直ちに集まって來なければいかぬ。消燈時刻にはいっせいに燈火を消さなければいかぬ。ところでゼントルマンというものは、定められた規則を嚴重に守るものであるが、それは規則にしばられてやるのではなくて、自己の良心にしたがって行動するのである。故にこの学校にはむずかしい規則は不要だと、先生は述べられた。それを聞いた学校の幹事や教授連は大いにその結果をあやぶみ、もし故意に規律を守らない者が現われたらどうなさるおつもりかと反問した。ところが先生は威儀を正し、『たゞ退学あるのみ。』と答えられた。（中略）俯仰天地に恥じざる行いをしなければならないと、みずから問うてみずから答え、町へ出てもみにくい行爲は決してなさず、自己の行動に非常に重きをおくようになった。もし誤って校規を犯そうものなら、進んで学監のところへ届け出で、『たゞ今かくかくのことで五分間遅刻いたしました。』と申し立てるような氣風が全校を支配し、学生一般の風紀が非常に改まった。」

得魚忘筌

書。額装。縦34cm・横130cm。視聴覚教室南壁に掲額。

「得魚忘筌」。「魚を得て筌（せん／うえ）を忘る」と読む。

筌とは、割竹などでつくった魚とりの道具で、外側が網体で構成されており、漏斗状の口から入ってきた魚介類を閉じこめて捕獲する漁具である。直接の意味は「魚を捕ると、使っていた道具のことを忘れる」ということだが、このことから「目的を達すると、それまで役立ったものを顧みなくなる」ことの喩えとして用いられる。「受けた恩に報いることを忘れる」という意味でも用いられる。出典は『荘子』外物篇であるが、「成功しても大切なことを忘れるな」という戒めの言葉であろう。

「昭和辛卯十二月五日」と署名されているところから、「Be Gentleman」と同時期に書かれたものと考えられる。

慧光普照

書。額装。縦34cm・横130cm。

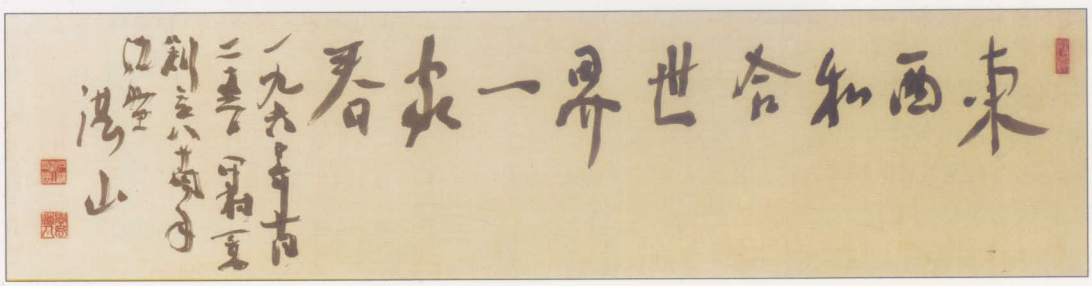
「慧光普照」は「慧光普（あまね）く照らす」と読む。「（仏が発する）智慧の光は、どこをもあまねく照らす」の意味である。揮毫の横には「第一高等学校創立七十周年　湛山」とあるので、昭和25（1950）年に書かれたものである。

東西和合世界一家春

書。額装。縦84cm・横130cm。

「東西和合して世界は一家の春」と読む。「一九六十年十月　甲府一高創立八十周年　湛山」とあるので、昭和35（1960）年に書かれたことがわかる。

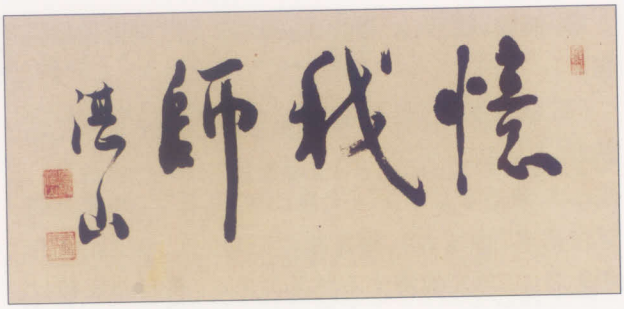
1960年は、西欧諸国の植民地であったアフリカから17の独立国が誕生した年で、「アフリカの年」といわれるが、一方でU—2撃墜事件に代表されるように、米ソ両国を対立軸とした東西冷戦が存在する中、この言葉は世界和平に情熱を傾けた石橋の願いを込めた筆であったのかもしれない。

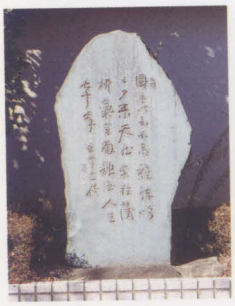


憶我師

書。額装。縦12cm・横46cm。校長室に掲額。

「我が師を憶（おも）ふ」と読む。本校西駐車場（弓道部練習場の東）にある「香川香南詩碑」の裏面に刻されている言葉であるので、この碑のために揮毫されたものであると考えられる。





香川香南詩碑

石碑。縦155cm・横93cm。陸軍編修。昭和36年に建立。西駐車場西脇に建立。

香川香南（少次郎）は、元本校国漢科教諭。碑文は「国手皆云ふ長命難しと酔吟日夕天然を楽しむ　質は蒲柳と雖も気は松菊　詩酒人生七十年　香南迂侠」と読む。

石橋湛山先生胸像

ブロンズ製。縦70cm・横24cm（台座110cm）。百周年記念館1階ホールに設置。創立114周年記念式典に合わせて、石橋湛山記念財団より寄贈された。

彫刻家の籔内佐斗司氏による1994年の作品で、東洋経済新報社と立正大学と本校に同じものがある。

寄贈に際して、当時の同窓会長・太田源一郎氏によって、胸像脇に次の銘文が置かれた。

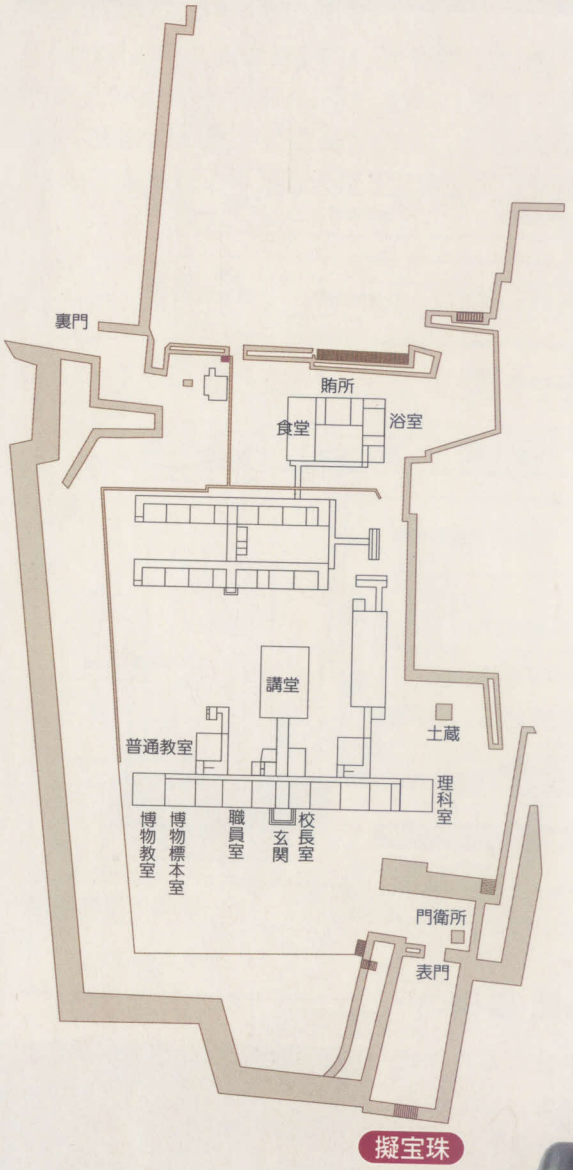
「石橋湛山先生は、山梨と母校県立甲府第一高等学校が生んだ偉大な先輩である。明治17年（1884）に生まれ、明治28年（1895）から同35年（1902）まで山梨県尋常中学校（現、甲府一高）に在学、特に札幌農学校でクラーク博士に学んだ大島正健校長の影響を強く受けた。早稲田大学に進み、卒業した後、東洋経済新報社で、主幹、社長を務め、大正から昭和にかけて民主主義、自由主義、平和主義を貫く論壇の雄として大いに活躍した。

第2次世界大戦後、政界に入り、大蔵大臣、通商産業大臣を経て、昭和31年（1956）に内閣総理大臣に就任した。翌年、病に倒れ、惜しまれて任を辞したが、その後も、中国、ソ連を歴訪、両国との国交回復の土台をつくるなど、昭和48年（1973）、88歳で死去するまで国際平和活動に力を注いだ。

日本を代表する言論人、政治家として世評ますます高い石橋湛山先生の胸像を、石橋湛山記念財団の御厚志を得て、ここに母校の一隅に据えて顕彰することは、学窓を同じくするものの限りない喜びである。」

一高生に語りかける至宝たち
懐かしき学び舎

鶴城校舎

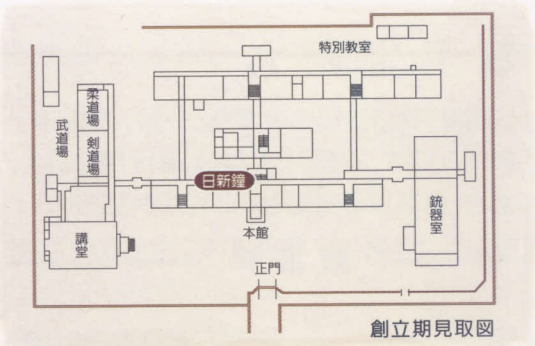


擬宝珠

縦54cm・横26cm。百周年記念館収蔵庫に保管。「宝永七庚寅年三月　御鋳物師沼上源蔵　藤原巻次」と刻まれている。もとは甲府城追手門の欄干につけられていた擬宝珠であるとされている。これが本校に伝わっているのは、本校が旧甲府城内に校地を構えていた期間（明治33年～昭和3年）に追手門が正門として利用されていたことによる。本校が現在地に移転した後、山梨県庁を建設する際に追手門とそれにかかる橋が取り壊されていくに及び、これを惜しんだ関係者が保管したのであろう。

因みに「宝永七年」は1710年に当たる。当時は柳沢氏が甲府城を支配していた時期であるので、この擬宝珠は柳沢氏による甲府城整備の一環として制作されたものであろう。制作に当たった沼上家は、甲府で代々鋳物師を務めており、明治時代の「甲府買物独案内」には「御用鋳物師」として記されている。

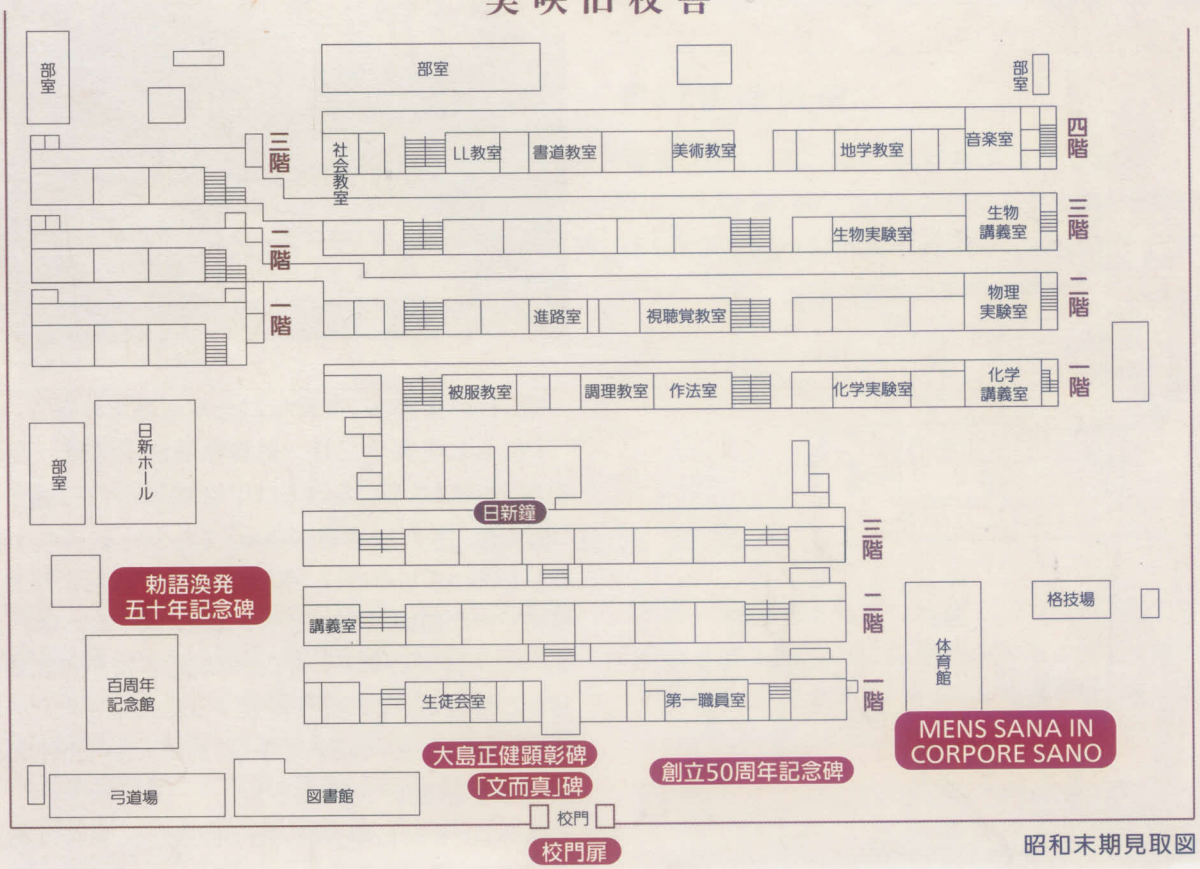
擬宝珠の一つは、上部が破損している。強烈な圧力で穴が開いたとみられるが、なぜ破損したのかという点に思いを馳せるのも楽しい。



創立期見取図

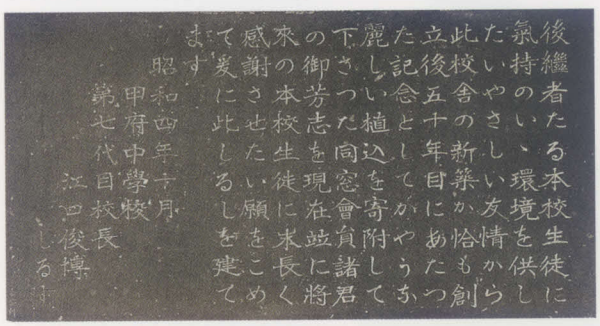
日新鐘

美咲旧校舎



昭和末期見取図

創立50周年記念碑


後繼者たる本校生徒に氣持のいゝ環境を供し
此校舎の新築か恰も創立後五十年目にあたつた記念としてかやうな麗しい植込を寄附して下さった同窓會員諸君の御芳志を現在竝に將來の本校生徒に末長く感謝させたい願をこめて爰に此しるしを建てます　昭和四年十月　甲府中學校第7代目校長　江口俊博しるす」（原文ママ）

かつて前庭東側に設置されていた、半円形の石製ベンチを模した造形物に埋め込まれていた銘板である。そこには創立50周年当時の校長（第10代）である江口俊博先生によって

「後繼者たる本校生徒に氣持のいゝ環境を供したいやさしい友情から此校舎の新築か恰も創立後五十年目にあたつた記念としてかやうな麗しい植込を寄附して下さった同窓會員諸君の御芳志を現在竝に將來の本校生徒に末長く感謝させたい願をこめて爰に此しるしを建てます　昭和四年十月　甲府中學校第7代目校長　江口俊博しるす」（原文ママ）

と記された。残念ながら、この銘板及び記念碑は現在の校舎建設に先立って旧校舎が取り壊される際、共に取り壊された。

校歌碑

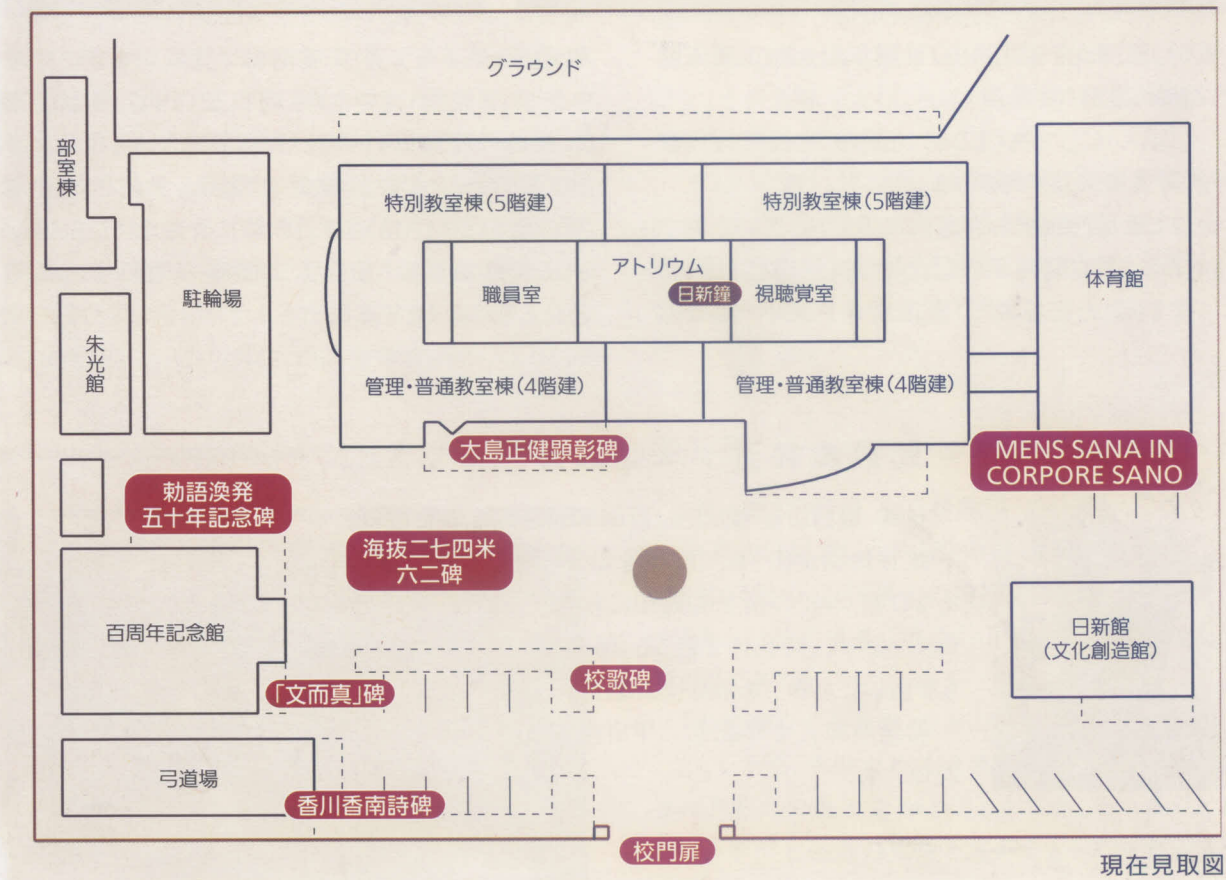
石碑。縦121cm・横240cm。昭和61年卒業生寄贈。校舎前庭に設置。

創立105周年・強行遠足第60回記念の年にあたる昭和61年2月19日に除幕式が行われた。この年は、現在の校歌が発表されてから37年、作詞者である上条馨氏の没後25年を経た年であった。

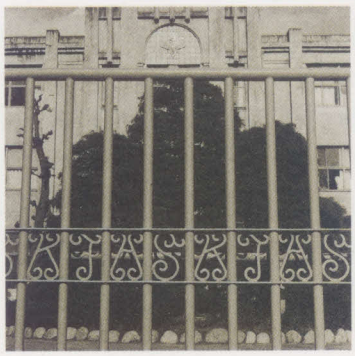
『創立120周年記念誌』では、校歌碑の文字が、昭和23(1948)年9月15日に発行された「甲府一高新聞」に掲載されたものに依拠しているとして、作詞者である上条馨氏の手掛けた原文と異なることを指摘している。

今回は、『創立120周年記念誌』の指摘に基いて、校歌は「作詞者の原文」とされるものを掲載したが、過去の『学校要覧』を確認すると、校歌に使用されている文字は時代によって異なる。判断は後世に仰ぎたい。

美咲新校舎



現在見取図



校門扉

門扉の中央部の「KFHS」は、現在地に存在した旧校舎時代の門扉に使用されていたものである。「KFHS」は「Kofu First High School」の頭文字をとったものである。

旧門扉は昭和34年卒業生寄贈。

「文而真」碑

石碑。縦135cm・横130cm。百周年記念館正面南脇（弓道場の北）に設置。

「文（ぶん）にして真（まこと）」と読む。本校第12代校長・大野芳麿先生の筆による。

かつては正門西脇の石庭内に設置されていた。

もともとは創立60周年の記念として、昭和15（1940）年に建てられた信条碑で『皇国精神ヲ深ム　誠心誠意ヲ以テ事ニ当ル　質実剛健ノ気風ヲ養フ　甲府中學校』と記されていたが、昭和22（1947）年10月末に、当時の校長（第14代）・近藤兵庫先生により、「字面ヲ削リ新シク大野前校長ヨリ指揮シテ載ク」旨が示され、昭和23（1948）年1月以降に改刻されたものらしい。この碑裏面は「創立六十周年　昭和十五年建之」と、当時のままである。

勅語渙発五十年記念碑（金子堅太郎）

石碑。縦170cm・横90cm。百周年記念館北側に設置。

教育勅語が出されて50年を記念した碑である。裏面の記名に「昭和十五年十月」とあるので、本校の創立60周年にあたるこの年が皇紀2600年にあたることを踏まえて建てられたもので、時代性を感じる。揮毫した金子堅太郎は伯爵で、大日本帝国憲法起草にも参画した人物である。「宝祚窮まりなし　克く忠に　克く孝に　皇紀二千六百年記念　勅語渙発五十年記念　甲府中学校のために　正二位伯爵　金子堅太郎謹書」と読む。

海抜二七四米六二碑

甲斐八ヶ岳会によって昭和15（1940）年に建立された、海抜100mごとに八ヶ岳連峰の権現岳頂上まで設置された28基と八ヶ岳山麓の駅に設置された7基の石碑のうちの一つ。

7寸角3尺高(約27cm角・114cm高）の御影石で、甲斐八ヶ岳会を創設した坂本増二郎の呼びかけで、募った寄付によって建立された。

角状の石碑の各面には「海抜二七四米六二」「明人倫致親和（人倫を明るくし親和に致す）」「皇紀二千六百年　甲斐八ヶ岳会」「賛助　山梨縣立甲府中學校」とある。もともとは甲府駅付近に建てられたものと考えられるが、元来の正確な所在地は不明である。現在は西駐車場北側植込みの中（百周年記念館側）にある。

MENS SANA IN CORPORE SANO（内藤多仲）

体育館入口付近の南壁に掲げられている、この文字は内藤多仲（明治37年卒）の書である。内藤多仲は「耐震構造学の父」と称される学者・建築家である。内藤が手掛けた建造物は数多く、東京タワー、通天閣、早稲田大学大隈記念講堂などがもっとも有名である。県内にも山梨県民会館、山梨県庁本館などの建造物があり、平成初期まで存在した本校体育館も内藤の設計によるものであった。「MENS SANA IN CORPORE SANO」はもともと旧体育館の入口に掲げられていたが、新体育館建造の際に移設された。

「MENS SANA IN CORPORE SANO」はラテン語で、その意味するところは「健全なる精神は健全なる肉体に宿る」である。

ブロンズ像は、須藤漠（昭和8年卒、元本校芸術科教諭）による作品で、モデルは花輪民夫（昭和16年卒、元本校体育科教諭）とされる。昭和30年卒業生の寄贈品である。

大島正健顕彰碑

石碑（一部レリーフ）。縦106cm・横155cm。校舎前面庭園に設置。

碑文には「Boys be Ambitious!」と石橋湛山の書による揮毫がなされ、「青年奮起して功名を立てよ馬上の遺言熱誠籠る　別路春寒し島松の駅　一鞭直ちに蹴る雪泥の行　クラーク先生を憶ふ　大島正健」と、大島正健による「クラーク先生」（『中等國語2』昭和22年・文部省）の一節が刻まれている。昭和40年建立。

レリーフは円鰐勝三（日展理事）の作品。

除幕式に同席した作家・中村星湖（明治36年卒）はその回想で、石橋湛山の挨拶の様子を残している。

「湛山は黒の背広で杖を片手に壇上に立ち静かに話しはじめた。

『不名誉なことだが、自分は甲府中学を二度落第した。しかし、そのために大島校長の教えを受け、クラーク先生の精神を知ることができ、それまでとは違った学問と生活の覚悟と方針をもって中学を卒業し、長い道中を歩んできた。』

あらまし、この辺りまで淡々と語ってきて、校長との出会いを追憶しての胸迫る感慨のためか、突然絶句した。冒し難い粛然とした空気のなかで、出席者は首を垂れて待った。

『不思議なことです。実に不思議というよりほかにない。』

湛山はそれだけをつけ加えて壇を降りた。」

一高生に語りかける至宝たち

本校の文化財

鯉（望月春江）

日本画。額装。縦92cm・横124cm。校長室に掲額。

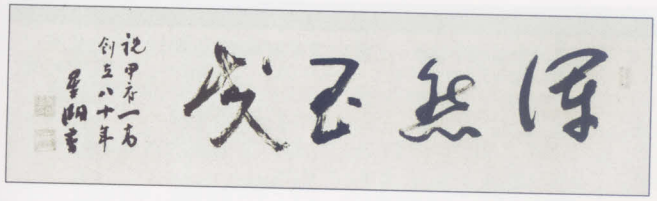
望月春江（大正2年卒）は、本名を尚という。日展参与、審査員等を歴任し、芸術院賞を受賞した著名な日本画家である。「鯉」は望月画伯が42歳のときの作品で、イタリアからの購入希望があったものを同窓生が買い取って本校に寄贈した。

培養國本（幣原坦）

書。額装。縦37cm・横61cm。

幣原坦は本校第6代校長である。東京帝国大学を卒業した後、本校の校長に就任した。幣原校長時代に本校は、甲府市錦町から旧甲府城内に校地を定めて移転した。後に台北帝国大学総長に就任した幣原校長は、戦前に幣原外交で有名な外務大臣で、戦後の内閣総理大臣となった幣原喜重郎の実兄である。「培養國本」は「國本を培養す」と読む。「甲府中学校創立六十周年を祝して　皇紀二千六百年」という署名があるので、台北帝国大学総長時代の書である。

渾然玉成（中村星湖）



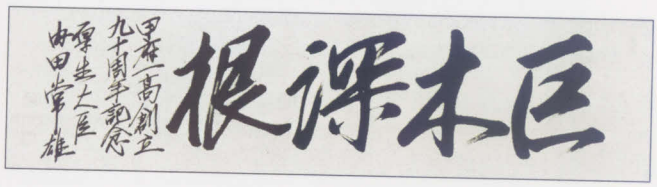
額装。（縦33cm・横116cm）

「渾然玉成　甲府一高創立八十周年を祝して　星湖書」

中村星湖（明治36年度）は、本名と将為という。

小説家、評論家で、本校在学中から文芸雑誌に投稿して坪内逍遥などに知られた。明治40（1907）年に『早稲田文学』に一等当選した『少年行』が出世作となった。

巨木深根（内田常雄）

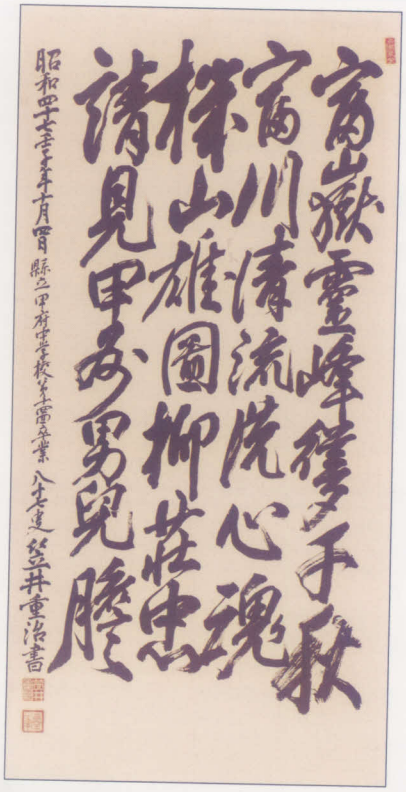


額装。（縦35cm・横135cm）

「巨木深根　甲府一高創立九十周年記念　厚生大臣内田常雄」

内田常雄（大正13年卒）は、東京帝国大学卒業後に大蔵省官僚を経て、昭和27（1952）年から衆議院議員として9回当選した。この間、厚生大臣、経済企画庁長官、自由民主党幹事長を歴任した。

七絶書（笠井重治）



全紙額装。（縦129cm・横66cm）

視聴覚室北壁に掲額。

昭和57年卒業生が額装して寄贈。

「富嶽の霊峰千秋に聳ゆ　富川の清流心魂を洗ふ　機山の雄図柳荘の忠　請ふ見よ甲州男児の胆　昭和四十七壬子年十月四日　県立甲府中学校第十四回卒業　八十七叟　笠井重治書」

笠井重治（明治36年卒）は、戦前には大戦回避のために活動し、戦後も日米親善に努めた国会議員で、日米文化振興会長等を歴任した。

「強行遠足第60回記念像」（須藤漠）

塑像。生徒昇降口。強行遠足の第60回開催を記念して昭和60（1985）年10月に設置。

かつて、旧校舎時代には、本館正面玄関に置かれていた。

元本校芸術科教諭の須藤漠（昭和8年卒）の作品である。「君よ走れ　新たな歴史を創る道程」の銘文は校内から募集し、小林正美（昭和61年卒）が入選した。

その他、本校の文化財

種類	作品名	制作者	制作者卒業年	特徴等
書	明治天皇御製	江口　俊博		軸装。(縦138cm・横34cm)　図書室内に収蔵。制作者は本校第10代校長。 「明治天皇御製　折にふれて　みちみちに　つとめいそしむ　国民の　身をすくよかに　あらせてしがな　昭和五年十月三十日　江口俊博拝書」
書	(養)正	田邊　治通	明治30年卒	額装。(縦34cm・横55cm)　大阪府知事や逓信大臣を歴任。 「正を養ふ　創立六十周年を祝して　皇紀二千六百年十月　田辺治通」
書	陸軍中将揮毫	井出　鉄蔵	明治38年卒	軸装。(縦68cm・横78cm)　陸軍中将。号は如山。 「秋晴れの富士こそ甲斐の姿かな　紀元二千六百年初秋　中将如山」
書	勇猛精進	三船　久蔵		額装。(縦58cm・横134cm)　講道館十段。 「勇猛精進　三船十段」
書	雲高気静	高田　早苗		額装。(縦34cm・横137cm)　文部大臣・早稲田大学総長を歴任。 「雲高く気静かなり」　大正丙寅秋日　半峰学人」
書	甲府中学校歌	大野　芳麿		額装。(縦31.5cm・横35.5cm)　制作者は本校第12代校長。 「斯道を遵守して日に偬焉たり　三綱五目の校風全し　須く発すべし皇国の精神美　剛健至誠の金鉄堅く　大弐の文機山の武　粋然として正気甲中に伝ふ　偉才先哲を駕ぐ無かるべけんや　千秋の岳晴天に映ゆ　甲府中学校の歌　大野芳麿」
書	俳句書	西脇順三郎		色紙額装。　詩人。　代表詩集「あむばるわりあ」。 昭和33年に講演会のために来校されて揮毫。裏面に「国語科蔵書」印 「秋のこだま　葡萄の光り　野をゆく日　西脇順三郎」
書	文部大臣揮毫	荒木萬壽夫		色紙額装。　北館1階廊下(放送室前)に掲額。　元文部大臣。 昭和38年6月の関東ブロック市町村教育委員会総会出席の際に揮毫。 「教育は建国の基礎にして師弟の和熟は育英の大本なり　甲府第一高等学校のために　文部大臣　荒木萬壽夫」
書	悠久之今	岩波　政雄		額装。(縦35cm・横136cm)　本校第23代校長。 「悠久の今　甲府一高創立百周年　学校長　岩波政雄」
書	養高志	名取　岱風		額装。寄贈時期不明。日展会員、全日本書道連盟参与、毎日書道会参与、東京書道会参与、山梨県書道会顧問。「高い志を養ふ」と読む。
書	白雲無盡時	遠藤　秀紀		額装。本校国語科教諭。平成30年ごろより保健室に掲額。 「白雲(はくうん)尽くる時なし」と読む。王維の詩「送別」の一節。
日本画	けいとう	望月　定夫	昭和5年卒	額装。(縦50cm・横50cm)　昭和30年ごろに寄贈。
日本画	猫ひまらやん	望月　定夫	昭和5年卒	額装。(縦143cm・横196cm)　本館1階正面玄関前廊下に掲額。
日本画	バラ	望月　定夫	昭和5年卒	額装。(縦64cm・横90cm) 創立103周年記念式典の際に、川手泰二氏(東京同窓会副会長、名古屋放送社長／いずれも当時)より寄贈。
日本画	トランプ	須藤　獏	昭和8年卒	日本画。額装。(縦152cm・横92cm)　視聴覚室北壁に掲額。 元本校教諭。東京美術学校卒業制作コンクール一席作品。
日本画	死と虚栄	須藤　獏	昭和8年卒	額装。(縦91cm・横122cm)
日本画	四神図	三枝　茂雄	昭和12年卒	額装。元本校教諭。国画会会員。昭和62年卒業生寄贈。視聴覚室北壁に掲額。
日本画	二宮尊徳先生物部巡村之図	多　景志		(縦60cm・横45cm)　作者については不詳。かつて定時制職員室に掲額。
油絵	風景	須藤　獏	昭和8年卒	額装。F12。(縦60.6cm・横50cm)
油絵	魚介	須藤　獏	昭和8年卒	額装。F10。(縦45.5cm・横53cm)
油絵	花屋	辻尾豊太郎		額装。(縦97cm・横138cm)　元本校英語科教諭。 昭和8(1933)年に独立美術展入選作品。
油絵	巴里のエグリーズ	鳥居　雅隆	昭和8年卒	額装。F50。(縦116.8cm・横80.3cm)　二期会同人。昭和40年ごろに寄贈。
油絵	快晴の鳳凰山	鈴木農夫男		額装。F12。(縦50cm・横60.6cm)　元本校芸術科教諭。一水会。山梨美術協会会員。峡北美術協会会長。特別教室棟1階(視聴覚室北側)廊下に掲額。
油絵	育みの間より花と乙女	山川　輝夫	昭和34年卒	額装。視聴覚室南壁に掲額。昭和60年卒業生寄贈。
油絵	原	佐野　智子		額装。F60。(縦97cm・横130.3cm)元本校教諭。創元会。山梨美術協会会員。創元展出品作品。創立百周年在職記念寄贈。特別教室棟1階(視聴覚室北側)廊下に掲額。
油絵	晩秋八ヶ岳	大森　雅典	昭和16年卒	額装。F50。(縦91cm・横116.8cm)　百周年記念館2階・会議室に掲額。 近代日本美術協会創立会員。第10回展で内閣総理大臣賞受賞を記念して寄贈。
油絵	花梨のある処	数野　繁夫	昭和34年卒	額装。日新館1階に保管。平成3年卒業生寄贈。 同タイトルの作品が別に創立130周年記念寄贈品として存在する。
油絵	花梨のある処	数野　繁夫	昭和34年卒	額装。創立130周年記念にて寄贈。管理・普通教室棟1階(視聴覚室南側)廊下に掲額。
油絵	親愛なる人魚姫へ	土橋　祥子	平成24年卒	平成22年度山梨県高等学校芸術文化祭・芸術文化祭賞。(全国総合文化祭出品)。 多摩美術大学へ進学。東階段2階踊り場に掲額。
油絵	Landscape	中込　靖成		東京51会より寄贈(平成26年7月26日)。管理・普通教室棟1階東階段付近に掲額。
油絵	ブラチアノ湖からの便り	菊島　明	昭和40年卒	F100。1979年制作。創立140周年記念にて寄贈(令和2年10月22日)。
油絵	NAVE	清水　勲	昭和37年卒	(縦70cm・横80cm)　1983年制作。田中直樹氏(昭和37年卒)が創立140周年記念にて寄贈(令和2年10月22日)。
油絵	すももと桃の咲く頃	内藤　綱男	昭和25年卒	F50。2010年制作。創立140周年記念にて寄贈(令和2年10月22日)。
油絵	運河のほとりの小さな村	内藤　綱男	昭和25年卒	F40。2010年制作。創立140周年記念にて寄贈(令和2年10月22日)。
油絵	卓上の形	加賀美　勳	昭和33年卒	額装。管理・普通教室棟1階事務室前廊下に掲額。 額縁の銘板より「昭和33年卒業生による竣工記念寄贈」とわかる。
水彩画	リンドスの糸杉	宮下　実	昭和33年卒	額装。日新館1階に保管。 額縁の銘板より「昭和33年卒業生による竣工記念寄贈」とわかる。

種類	作品名	制作者	制作者卒業年	特徴等
アクリル画	紫色にほのめく古都	米倉　寿仁	大正11年卒	額装。F50。(縦91㎝・横116.8㎝)　サロン・ド・ジュワン会員。創立百周年記念美術展出品作で、本校創立百周年を記念して寄贈。
ミクストメディア	文字・邂逅	望月　哲		額装。昭和55年制作。(平成26年3月　植松永雄氏寄贈)
写真	紅葉	早川　清	昭和27年卒	額装。2001年寄贈。
焼物	九谷焼			(縦61㎝・横34㎝)　校長室に所蔵。　「大正十三年卒業生一同」
彫金	茶色のアルバム	堀口　光彦	昭和33年卒	額装。(縦101㎝・横188㎝)　日新館1階ホールに掲額。 現代工芸展大賞。日展特選2回。昭和60年卒業記念品。
レリーフ	大島正健先生胸像	三井　英俊	大正5年卒	(直径46㎝)　三石造美術院主宰。百周年記念館に保管。
造形	珪化木			創立128周年時に水村勝氏(昭和51年卒)より寄贈。校長室に展示。
パネル	校是額			本校の校是を明記。平成15年卒業生寄贈。
パネル	山梨県立甲府第一高等学校 創立130周年記念事業 甲府一高資料展示			平成23年10月22日付け。目的。策定委員。本校沿革。(視聴覚室南側廊下に掲額) 強行遠足沿革等。高額寄付者。(視聴覚室北側廊下に掲額) 本校関係者・卒業生(大島正健、江口俊博、野尻抱影、早川徳次、石橋湛山、中村星湖、笠井重治、内藤多仲、飯田蛇笏、飯田龍太、功刀金二郎、小林中、望月春江、三神吾郎)(視聴覚室内に掲額)。 石橋湛山書簡(昭和23年1月31日付け)(視聴覚室内に掲額)。
銘板	旧校銘板			現在地の旧校舎時代に正門に掲額されていたもの。 「県立甲府第一高等学校」とある。正面玄関に展示。
模型	旧校舎模型			平成3年卒業生・同窓会寄贈。正面玄関に展示。

応援歌	鶴城に			作詞者・作曲者不詳。現存する応援歌の中で最も古い。東京高等師範学校・東京文理科大学・東京教育大学(現・筑波大学)の宣揚歌「桐の葉」の旋律を改編したものか、あるいは早稲田・慶應義塾のいずれかの古い応援歌が改編されたものか。
応援歌	起て起て起て健男児			作者不詳。長調と短調が混在した旋律で、「鶴城に」と同様に古くから歌われたものと考えられる。
応援歌	希望の光			作詞者・作曲者不詳。昭和になってからつくられたものらしい。
応援歌	起て撃て勝て	足立　市朗	昭和28年卒	昭和63(1988)年発行『大阪山梨県人会70周年記念誌』に「幻の応援歌」という足立氏の文章がある。「(前略)当時、応援団長だった私は、母校の伝統に新風を吹き込む為、新しい応援団旗と新しい応援歌(筆者作詞・作曲)を用意し山静大会(野球の甲子園地区予選)での発表を目指していた。しかし夢叶わず。この歌を後輩の應援團員に一小節ずつチーチーパッパッと悪戦苦闘しながら伝授したものの、その後どのように歌い継がれているか知らなかった。昭和52年のある日、テレビから流れる音に驚いた。甲府一高強行遠足で疲れた生徒に(吹奏楽の)先輩がラッパで応援しているシーンである。その応援歌、そのメロディこそ25年前、全校で歌うはずだった<起て撃て勝て>であった。口ずさんだ。涙が溢れ出た。」
応援歌	常勝一高			作詞者不詳。既成曲旋律。
生徒会歌	生徒会歌・生徒会讃歌	小林　綱夫 (小林是綱)	昭和38年卒	昭和36(1961)年に、校内外で生徒会歌を募集した際、25点の中から選ばれた2点でいずれも小林氏の作品。前者は生徒会歌として、應援團吹奏楽部の創設者の一人であった大学生(当時)の芦澤正巳(昭和34年卒)が作曲、後者は3年生(当時)の樋口宙輝(昭和37年卒)が作曲した。
寮歌	甲府中学校寄宿舎寮歌	野尻　抱影		作詞者の野尻抱影(本名は正英)は元本校英語科教諭。ハレー彗星の研究や「冥王星」の命名者としても知られる。明治42年4月20日の期日あり。
記念歌	甲府中学校創立記念歌			「創立四十周年記念歌」(渡邊義丸作詞・根本剛作曲。大正9年) 「創立五十周年記念歌」(雑誌部員合作、昭和4年) 強行遠足の歌「信濃路はるかに」(八田政季作詞・作曲者不詳。昭和38年) 強行遠足の歌「歩みをいざ」(渡邊弘作詞・作曲者不詳。昭和38年)
その他	愛唱歌			「太鼓橋(擬宝珠)」(作者不詳)旋律等も不詳。 「ツーライン」(作者不詳)甲府中学の帽子の2本線と甲府高等女学校(現・甲府西高)の袴の2本線に因んだ歌。 「俺は一高の伊達男」(作詞者不詳。)「関東の流れ者」の旋律で、日川高校にも同じ旋律の曲がある。
備品	演壇			(縦90㎝・横180㎝)　「寄贈　昭和三十二年度　卒業生一同」の銘板あり。 現在は百周年記念館2階に安置。
備品	提灯(甲府第一高等学校)			(縦40㎝・横22㎝)　百周年記念館資料室に収納。 「山梨県立　甲府第一高等学校」との標記あり。かつて強行遠足の際に使用した。
書籍	日新文庫			本校卒業生の著書で、学校に寄贈されたもの。
書籍	大島文庫			本校第7代校長大島正健先生寄贈の図書。

※上記の一覧から漏れている寄贈品等があった場合には御容赦いただきたい。なお、今回の調査では作者不詳等により資料化できない作品もあったことを付記する。

種類	作品名	製作者	製作者卒業年	特徴等
壁画	モザイク壁画	須藤　獏	昭和8年卒	タイル・モザイク。旧日新ホール入口。
庭園等	正門西脇石庭			旧図書館東側に存在した。今も南端の石の配置は変わらない。同窓会によって造営された。
庭園等	旧本館前庭東部			正面ロータリー東側に存在した。東京同窓会によって造営された。
庭園等	池			旧図書館前(現在の西駐車場北側植込みの西端辺り)に存在した。 昭和2年卒業生の卒業30周年記念として造営。
庭園等	旧日新ホール前庭			現在の立体駐輪場東縁の辺りに存在した。同窓生の甲子会・御坂会によって造営された。
庭園等	旧中庭庭園			現在の管理・普通教室棟と特別教室棟の間を東西に抜けた空間に、かつて中庭があった。惜城会によって整備され、四季花あふれる空間であった。わずかに「惜城会」碑はグラウンド南東隅の植込みの中に残っている。

雑 記

いつの時代も「新しき世の鑑」として…。

一高には、「次代を担う人材を育成する空気が宿っている」と感じる。

今回、縁あって本校創立140周年記念誌を編集するにあたり、資料に目を通したり、校内を歩き回ったり、はたまた同窓生と話す機会を得た。今回の機会を通して、改めて感じたのは「卒業してから30余年が過ぎた今も、この学校からいろいろ教わっている」という感慨である。

この記念誌では、特集Ⅲに「一高の至宝」と題して、本校の有形・無形の文化財を取り上げた。当然ながら、その全部を紹介することは叶わなかったし、編集の都合上、特に「無形の文化財」にあたるものは、その一部を一覧表に掲載するにとどめた。紹介できなかったことは多い。

紹介しきれなかったものの一つに、本校が輩出した多くの「人材」がある。もとより、創立以来約37,000人にのぼる本校同窓生の足跡を事細かに紹介することは不可能だが、わずかな紙面をもって、各界の「パイオニア」とでもいうべき人材に注目して、数人だけ紹介したい。

東京地下鉄(現在の東京メトロ)を設立し、地下鉄の父と称された早川徳次(明治33年卒)。日本プロ野球が設立されるずっと前にアメリカ大陸でプロ野球選手として活躍した謎の日本人、ジャップ・ミカドこと三神吾郎(明治41年卒)。宮沢賢治の親友としても知られ、『銀河鉄道の夜』のカムパネルラのモデルともされる詩人の保坂嘉内(大正4年卒)。陰の財界総理と称された実力者で、日本開発銀行(現・日本政策投資銀行)の初代総裁となった小林中(大正5年卒)。1試合5盗塁の未だ破られていない甲子園記録を持つ五味芳夫(昭和11年卒)。1970年代に人気を博した「ザ・ガードマン」や「赤いシリーズ」などの演出・脚本を手掛けて、大映ドラマの基礎をつくった増村保造(昭和17年卒)。キティちゃんでもおなじみのファンシーキャラクターを生み出したサンリオの創業者である辻信太郎(昭和20年卒)。1960年代の日本代表サッカー選手として昭和39(1964)年の東京五輪にも名を連ねた保坂司(昭和30年卒)。比較的、新しいところで言えば、「美少女戦士セーラームーン」シリーズを世に出して、美少女戦隊モノの火付け役となった武内直子(昭和60年卒)や本校在学中にソウル五輪(1988年)でアーチェリー競技に出場した中込恵子(平成元年卒)…。

列挙すれば、たちまち紙面が足りなくなる。

さて、創立140周年記念式典の折、宮島雅展同窓会長(当時、昭和39年卒)が祝辞において、同窓会から在校生・教職員に齋藤孝著『読書力』(岩波新書)を贈った意味について語る中で、発せられた次の言葉は印象的だった。

「情けないが、この本に出会ったときに『もっと読んどきゃよかったなぁ』という思いだった。時間がないわけではなかったのに、読まずに済ましてきた人生だった。」

そして、「短綆(たんこう)は深井(しんせい)の泉を汲むべからず(短い釣瓶では深い井戸の水を汲むことはできない)」という故事を紹介され、読書を通じて人間としての深みが増すように研鑽してほしいという願いを託された。

その後、同窓会の大先輩で、御年100歳を迎えられた神宮寺敬氏(昭和12年卒)が特別に登壇されたことも記憶に残る。神宮寺氏は、笑顔で元気な姿を見せてくださりながら、御自身の経験を踏まえて「戦争だけはやめた方がいい。同窓会の皆さんにもこれだけは訴えておきたい。」と口にされた。

一高には「歴史」と「伝統」がある。ただ、それは「古臭いもの」「しがみつくもの」ではなく、ここに学んだ者や学びゆく者が「次代」に向けて発する「新しき世の鑑」としてのメッセージだと感じる。

本校創立140年の歩みと日本と世界

年号(西暦)	校長	本校の特記事項	日本の歴史
明治13(1880)		1月 9日 山梨県中学校規則制定、入学志願者募集 10月23日 山梨県師範学校内に中学校を併設 開校の式典挙行日を本校創立記念日とする	
明治14(1881)		1月 8日 師範学校を山梨学校と改称	10. 明治十四年の政変、国会開設の勅諭、自由党結成
明治15(1882)		1月10日 山梨学校を徽典館と改称	3. 立憲帝政党結成 4. 立憲改進党結成 7. 壬午軍乱 10. 日本銀行開業
明治16(1883)			
明治17(1884)	吉田義静	4月 8日 吉田義静が徽典館長に就任（初代校長）	10. 秩父事件 12. 甲申事変
明治18(1885)			4. 天津条約の締結 12. 内閣制度の採用
明治19(1886)			10. ノルマントン号事件
明治20(1887)		1月 3日 徽典館中学科を山梨県尋常中学校と改称	12. 三大事件建白運動、保安条例の制定
	平井 正	7月13日 平井 正が第2代校長に就任	
明治21(1888)		1月 1日 甲府市錦町に校地移転	4. 市制・町村制公布、枢密院の設置
明治22(1889)			2. 大日本帝国憲法の発布、皇室典範の制定
明治23(1890)		4月 尋常中学校第1回卒業式	5. 府県制・郡制の公布 7. 第1回衆議院議員総選挙
	長倉雄平	7月 4日 長倉雄平が第3代校長に就任	○教育勅語の発布
	村上孚光	10月11日 村上孚光が第4代校長に就任	○東京―横浜間に電話が開通
明治24(1891)			5. 大津事件 12. 足尾銅山事件が社会問題化
明治25(1892)			2. 第2回衆議院議員総選挙（松方内閣による選挙干渉）
明治26(1893)	黒川雲登	3月30日 黒川雲登が第5代校長に就任	
明治27(1894)			8. 日清戦争がはじまる（～1895. 4）
明治28(1895)		4月20日 山梨県尋常中学校規則制定	4. 下関条約の締結、三国干渉
明治29(1896)			3. 進歩党の結成
明治30(1897)		5月 修学旅行（関西方面） 8月 臨時県議会で尋常中学校の定員を500名に増員建築費38,388円を可決 10月15日 秋季大運動会（第1回）実施 以後毎年実施	3. 貨幣法の公布（金本位制の実施）
明治31(1898)		5月17日 春季大運動会（第2回）実施 以後毎年実施	6. 自由党・進歩党が合同して憲政党を結成、隈板内閣
	幣原 坦	5月24日 幣原 坦が第6代校長に就任	
明治32(1899)		1月 9日 同窓会会則が定まる 3月 臨時県議会で校地を舞鶴城跡に移転決定 4月 中学校令改正に伴い、山梨県中学校と改称 5月 舞鶴城跡に校舎起工	
明治33(1900)		4月25日 甲府市錦町より舞鶴城跡の新校舎に移転落成を兼ね、開校式を挙行 4月29日 本校の分校として山梨県都留分校設置を告示	3. 治安警察法の公布、軍部大臣現役武官制の制定 9. 伊藤博文が立憲政友会を組織
明治34(1901)	大島正健	3月26日 大島正健が第7代校長に就任 4月 1日 山梨県立第一中学校と改称 4月22日 （山梨県立第二中学校が開校）	4. 八幡製鉄所の操業開始 12. 田中正造が足尾銅山鉱毒事件を天皇に直訴
明治35(1902)		6月15日 都留分校を大月に移転する旨の告示	1. 日英同盟の締結
明治36(1903)		4月 都留分校を県立第二中学校都留分校とする	
明治37(1904)			2. 日露戦争の勃発（～1905. 9） 8. 第一次日韓協約
明治38(1905)			9. ポーツマス条約の締結 日比谷焼打ち事件 11. 第二次日韓協約 12. 漢城に統監府を設置 ○東北地方に饑饉
明治39(1906)		6月 1日 山梨県立甲府中学校と改称 9月17日 校旗制定の式を挙行 11月 6日 修学旅行で日光・中宮祠・足尾から諏訪へ（4・5年）	3. 鉄道国有法の制定 9. 関東都督府の設置 11. 南満州鉄道株式会社の設立
明治40(1907)		10月 5日 野球・庭球・撃剣の3部が諏訪中学校に遠征 10月30日 教育勅語奉読式	7. ハーグ密使事件、第三次日韓協約
明治41(1908)			

年号(西暦)	校長	本校の特記事項	日本の歴史
明治42(1909)			
明治43(1910)		10月23日　創立30周年記念式典挙行	5. 大逆事件 8. 韓国併合・朝鮮総督府の設立
明治44(1911)		1月 7日　同窓会創立協議会開催	
明治45(1912) 大正元		4月 9日　同窓会総会開催 8月 3日　先帝陛下哀悼式挙行 10月12日　修学旅行で京都方面へ（4・5年）	7. 明治天皇崩御 12. 第一次護憲運動
大正2(1913)		6月 3日　川村麟也（明治30年卒）が医学博士の学位を受ける（本校卒業生で初めての博士が誕生）	2. 大正政変 6. 軍部大臣現役武官制の改正
大正3(1914)	末久喜十郎	9月 7日　末久喜十郎が第8代校長に就任	1. ジーメンス事件 8. 第一次世界大戦に参戦
大正4(1915)		11月10日　御大典奉祝式　御大典記念中等学校連合大運動会	1. 中国に対して二十一か条の要求 12. 大戦景気が始まる
大正5(1916)			10. 憲政会の結成
大正6(1917)	田村喜作	7月 9日　田村喜作が第9代校長に就任	9. 金輸出禁止 11. 石井・ランシング協定の締結
大正7(1918)			8. 米騒動、シベリア出兵（～1922） 9. 原敬内閣の成立（本格的な政党内閣）
大正8(1919)			3. 朝鮮半島で三・一独立運動が展開される 6. ヴェルサイユ条約の締結
大正9(1920)		10月23日　創立40周年記念式典挙行・祝賀会開催	1. 国際連盟に加盟（常任理事国） 3. 戦後恐慌が始まる 5. 上野公園で日本初のメーデー
大正10(1921)			11. ワシントン会議の開催（～1922）
大正11(1922)			3. 全国水平社の設立
大正12(1923)	江口俊博	6月27日　江口俊博が第10代校長に就任 9月20日　生徒定員を1,000名とする	
大正13(1924)		11月 4日　第1回強行遠足（東京方面、穴山新府城跡、御岳昇仙峡）	1. 第二次護憲運動の開始 6. 護憲三派内閣の成立
大正14(1925)		11月 4日　第2回強行遠足（松本方面）	1. 日ソ基本条約の締結 4. 治安維持法の制定 5. 普通選挙法の制定
大正15(1926) 昭和元		6月 6日　庭球部が全国中等学校庭球大会で優勝 11月　野外演習（1～4年） 12月　軍隊宿泊が始まる（5年）	12. 大正天皇崩御
昭和2(1927)		1月14日　学校軍事教練の査閲 2月 7日　御大葬遥拝式挙行 10月15日　剣道部が全国中学校剣道大会で優勝	3. 金融恐慌　5. 第一次山東出兵 6. 立憲民政党の結成
昭和3(1928)		2月20日　校歌制定（三井甲之作詞・東京音楽学校作曲） 9月 1日　西山梨郡千塚村（現在地）の新校舎で初授業	3. 三・一五事件　4. 第二次山東出兵 6. 張作霖爆殺事件（満州某重大事件）
昭和4(1929)		10月22日　校舎落成式挙行 10月23日　創立50周年記念式挙行 10月24日　創立50周年記念大運動会開催 同窓会が校舎前の庭園を寄贈	○大学卒業者の就職難 4. 四・一六事件 10. 世界恐慌に端を発して昭和恐慌がおこる
昭和5(1930)		5月15日　『創立五十周年記念誌』発行	1. 金輸出解禁 4. ロンドン海軍軍縮条約の締結（統帥権干犯問題） ○米価などの価格暴落（農村危機）、失業者増大
昭和6(1931)		4月17日　御真影奉迎	4. 重要産業統制法の公布 9. 柳条湖事件（満州事変勃発） 12. 金輸出再禁止 ○東北地方大凶作
昭和7(1932)	隈部以忠	3月10日　陸軍記念日　全校生徒が演習に参加 3月31日　隈部以忠が第11代校長に就任	2. 血盟団事件、リットン調査団の来日 3. 満州国の建国宣言　5. 五・一五事件 9. 日満議定書の調印
昭和8(1933)		7月 1日　応援歌（篠原作詞・小池作曲）発表	3. 国際連盟の脱退
昭和9(1934)			12. ワシントン条約の破棄
昭和10(1935)		8月13日　野球部が第21回全国中等学校野球大会（甲子園）初出場	2. 美濃部達吉の天皇機関説を貴族院で攻撃 8. 国体明徴声明　8. 相沢事件

年号(西暦)	校長	本校の特記事項	日本の歴史
昭和11(1936)			1. ロンドン海軍軍縮条約の脱退 2. 二・二六事件 5. 軍部大臣現役武官制の復活 11. 日独防共協定の成立
昭和12(1937)	大野芳麿	9月 1日 大野芳麿が第12代校長に就任	7. 盧溝橋事件（日中戦争の勃発） 10. 国民精神総動員運動の開始 11. 日独伊三国防共協定の調印
昭和13(1938)		このころから野外教練・勤労奉仕等が盛んになる	1. 第一次近衛声明(11. 第二次　12. 第三次) 4. 国家総動員法の制定
昭和14(1939)			7. 国民徴用令の公布、米国が日米通商航海条約破棄を通告 10. 価格等統制令の公布
昭和15(1940)		10月23日 創立60周年記念式典挙行	9. 日独伊三国同盟の締結 10. 大政翼賛会の結成 11. 大日本産業報国会の結成、紀元2600年記念式典
昭和16(1941)		4月 1日 甲府中学校報国団結成（校友会を改称） 10月16日 報国隊結成式挙行、軍事教練・勤労奉仕・防空訓練・軍慰問等が盛んになる	4. 日ソ中立条約の締結 7. 関東軍特殊演習の実施 7. 日本軍が南部仏印進駐 8. 米国の対日石油輸出禁止 10. 東条英機内閣の成立 12. 真珠湾攻撃・マレー半島上陸（太平洋戦争の勃発）
昭和17(1942)			2. シンガポール占領 6. ミッドウェー海戦に敗北
昭和18(1943)		10月 このころより援農のための勤労動員が多くなる	2. ガダルカナル島を撤退 5. アッツ島で日本軍が玉砕 11. 大東亜会議を開催 12. 学徒出陣の開始
昭和19(1944)	永井徳潤	3月10日 『強行遠足二十周年記念誌』発行 4月17日 決戦非常措置要綱に基づく学徒勤労動員に関する訓令、農家・飛行場整備・軍需工場等への動員が多くなる 6月16日 永井徳潤が第13代校長に就任 11月 4日 第21回強行遠足（1・2年のみを対象）	3. インパール作戦の実施 6. 大都市の学童疎開を決定 7. サイパン島の陥落、空襲の激化 8. 学徒勤労令・女子挺身勤労令の公布 10. 神風特別攻撃隊が初めて出撃
昭和20(1945)		3月 陸軍大学校が本校本館の1・2階西半分に疎開、第56回卒業式を陸軍造兵廠（5年の動員先、相模原）で実施、第57回卒業式を海軍航空技術廠（4年の動員先、横須賀）で繰上げ実施 7月 6日 甲府空襲において小講堂・特別教室・新館等を焼失 9月27日 午前・午後に分けて二部授業開始 10月30日 同盟休校で授業停止 11月 3日 強行遠足中止	3. 東京大空襲、硫黄島の日本軍が全滅 4. 米軍が沖縄本島に上陸 7. 甲府空襲 8. 広島に原爆投下、ソ連が対日宣戦、長崎に原爆投下 8. ポツダム宣言受諾（終戦の詔勅がラジオで放送） 10. 連合国軍最高司令官総司令部が設置、人権指令 11. 各政党の結成 12. 衆議院議員選挙法の改正（女性参政権） 12. 労働組合法の制定、第一次農地改革
昭和21(1946)	近藤兵庫	2月12日 生徒自治会委員選挙 3月31日 近藤兵庫が第14代校長として着任 8月 1日 旧教科書使用禁止 10月29日 第22回強行遠足を実施 11月 3日 明治節記念式・新憲法公布記念式を挙行	1. 天皇の人間宣言、ＧＨＱによる公職追放指令 2. 金融緊急措置令の公布 5. メーデー復活、極東国際軍事裁判（東京裁判）が開廷 10. 自作農創設特別措置法が公布 11. 日本国憲法が公布
昭和22(1947)		4月 1日 新学制施行により山梨県立甲府中学校併設中学校開設 4月 8日 始業式　学制改革のため1年生を募集停止 4月15日 校友会規約改正審議 5月 3日 憲法施行記念式を挙行 9月19日 新制高校実施準備委員会選挙 9月23日 校歌信条改正委員会発足	4. 労働基準法・独占禁止法・地方自治法の公布 5. 日本国憲法の施行 9. 労働省の設置 12. 過度経済力集中排除法の公布
昭和23(1948)		2月24日 校章決定 3月 1日 甲府中学校第60回卒業式（旧制中学校最後の卒業式）	

年号(西暦)	校長	本校の特記事項	日本の歴史
		4月 1日　学制改革により山梨県立甲府第一高等学校と改称（全日制・定時制・通信制の3課程及び併設中学校併置）	
		4月23日　ＰＴＡ総会を開催	
		5月20日　甲府一高新聞第1号を発行	
		10月22日　新校歌発表会　文化祭を開催	
		10月23日　創立記念式典・校舎落成記念音楽会	11. 極東国際軍事裁判判決 12. 経済安定九原則の発表
昭和24(1949)		3月 2日　第1回卒業証書授与式	3. ドッジ・ライン発表
		3月31日　併設中学校廃止	4. 単一為替レート（1ドル＝360円）
		6月 4日　第1回高校総合体育大会男子総合優勝（以後第3回まで連続優勝）	6. 行政機関の大量人員整理 7. 下山事件・三鷹事件　8. 松川事件 9. シャウプ勧告
昭和25(1950)		4月　男女共学が始まる	4. 公職選挙法の公布 8. 警察予備隊の設置
	篠原寛二	3月31日　篠原寛二が第15代校長として着任	9. レッド・パージが始まる ○朝鮮戦争で特需景気
		10月21日　創立70周年記念行事開始（～10月29日）	
		10月23日　創立70周年記念式典を挙行	
		11月 1日　第26回強行遠足（女子生徒が初参加：穴山まで）	
		11月13日　修学旅行再開（2年：奈良・京都方面）	
昭和26(1951)		1月 1日　『創立70周年記念誌』発行	9. サンフランシスコ平和条約・日米安全保障条約の締結
昭和27(1952)		3月 1日　全日制第4回・定時制第1回卒業証書授与式	5. 日米行政協定の調印 7. 破壊活動防止法の制定 10. 警察予備隊を保安隊に改組
昭和28(1953)		音楽館が完成	
昭和29(1954)		3月14日　新入生学力検査が始まる	3. ビキニ水爆実験で第五福竜丸が被爆 ＭＳＡ協定の調印
		3月18日　新入生合格発表（500名）　この年の東京大学合格者18名	
	雨宮重治	4月 1日　雨宮重治が第16代校長として着任	7. 防衛庁と陸・海・空の自衛隊が発足
		8月 2日　文部省が高校の入学者選抜方法を決定（中学校必修教科及び選択教科の全部）	
昭和30(1955)		2月23日　体育館落成式	8. 第1回原水爆禁止世界大会の開催 9. ＧＡＴＴ正式加盟
		10月25日　強行遠足が翌日（26日）の降雨により途中中止	11. 自由民主党の結成（保守合同）⇒55年体制 ○スモン患者の発生　○神武景気
昭和31(1956)		12月23日　石橋湛山（明治35年卒）が内閣総理大臣に任命	10. 日ソ共同宣言　12. 国際連合への加盟
昭和32(1957)	斎藤俊章	4月 1日　斎藤俊章が第17代校長として着任	○なべ底不況（～1958）
		10月23日　図書館・特別教室落成	
昭和33(1958)		3月 1日　全日制第10回・定時制第7回・通信制第1回卒業証書授与式	12. 一万円札の発行 ○日教組・総評が勤務評定反対闘争を展開
昭和34(1959)		8月13日　台風で県下の被害甚大（8月18～22日に生徒勤労作業出動）	4. 皇太子（現在の上皇陛下）結婚式（テレビ契約者増大）
		9月30日　強行遠足が伊勢湾台風による道路欠損状況劣悪により中止	9. 伊勢湾台風（死者5000人超） ○岩戸景気（～1961）
昭和35(1960)		10月23日　創立80周年記念式（翌日に創立80周年記念講演）	1. 日米新安全保障条約の調印、60年安保闘争の激化 6. 全学連が国会に突入して警官隊と衝突
		10月25日　創立80周年記念文化祭 このころから学力テスト・模擬試験などが盛んになる	12. 国民所得倍増計画の発表
昭和36(1961)		3月24日　日新ホール落成式	
	広瀬勝雄	4月 1日　広瀬勝雄が第18代校長として着任	6. 農業基本法の制定
		8月14日　野球部が全国高校野球選手権大会に出場	
		10月26日　生徒会歌・生徒会讃歌発表会	
昭和37(1962)		10月15日　第37回強行遠足（佐久方面にコースを変更）	
昭和38(1963)		9月28日　強行遠足の歌を発表	
昭和39(1964)		10月19日　東京オリンピック観覧のための休業（～30日）	9. 名神高速道路の一部開通 10. 東海道新幹線の開業 第18回オリンピック東京大会
昭和40(1965)			6. 日韓基本条約の調印 8. 佐藤栄作首相の沖縄訪問 ○いざなぎ景気（～1970）

年号(西暦)	校長	本校の特記事項	日本の歴史
昭和41(1966)		2月28日 『創立八十五周年記念強行遠足沿革誌』発行	
	高遠啓一	4月 1日 高遠啓一が第19代校長として着任	1. 戦後初の赤字国債発行 3. 人口1億人突破
		7月25日 集中豪雨による被害者宅に救援作業	12. 建国記念の日制定 ○航空機事故があいつぐ
昭和42(1967)			8. 公害対策基本法の公布 9. 四日市ぜんそく訴訟
昭和43(1968)		3月11日 高校入学学力検査（甲府南高校との総合選抜制度開始）	2. 成田空港建設反対運動激化
		4月 2日 入学式 甲府南高校との総合選抜による最初の入学生	4. 小笠原諸島返還協定 5. イタイイタイ病の公害病認定 6. 大気汚染防止法・騒音規制法の制定
		8月10日 野球部が第50回全国高校野球大会に出場	10. 国際反戦デー 11. 明治百年記念式典 ○ＧＮＰが資本主義国第2位になる ○全国115大学で紛争（全共闘運動）
昭和44(1969)	根津修蔵	4月 1日 根津修蔵が第20代校長として着任	1. 機動隊導入により東京大学安田講堂占拠解除
		この年から翌年にかけて高校生の学生運動参加が盛んになる	5. 東名高速道路全線開通
昭和45(1970)		10月20日 創立90周年記念式典を挙行	2. 核拡散防止条約の調印 3. 日航よど号ハイジャック事件 11. 三島由紀夫が自衛隊駐屯地内で割腹自殺 ○米の減反政策
昭和46(1971)		10月13日 第46回強行遠足が降雨のため途中中止 定時制は最後の参加	6. 沖縄返還協定の調印 7. 環境庁の発足
		10月22日 一高祭（文化祭を改称、～10月24日）	11. 非核三原則を国会で採択 12. 10か国蔵相会談（円切上げ：1ドル＝308円）
昭和47(1972)		4月 定時制・通信制はこの年に中央高校に吸収される	1. グアム島で旧日本兵（横井庄一氏）発見 2. 連合赤軍による浅間山荘事件
		5月17日 新校舎北館落成式	5. 沖縄復帰 6. 田中角栄が『日本列島改造論』を発刊 9. 日中共同声明を発表
昭和48(1973)			2. 変動為替相場制に移行 10. 第一次石油危機（～1974） ○狂乱物価、異常インフレ
昭和49(1974)		3月 1日 全日制第26回・定時制第23回・通信制第17回卒業証書授与式（定時制・通信制はこれを以て廃止）	
	若林 勇	4月 1日 若林勇が第21代校長として着任	11. 田中角栄首相の金脈問題が発覚 ○戦後初のマイナス成長、経済不況深刻化
昭和50(1975)		4月 総合選抜制度に甲府西高校が加わり、3校総合選抜となる	3. 山陽新幹線開通 11. 第1回先進国首脳会議に三木武夫首相が出席
昭和51(1976)	山下 穆	4月 1日 山下穆が第22代校長として着任	7. ロッキード事件で田中角栄前首相が逮捕
昭和52(1977)		4月 総合選抜制度に甲府東高校が加わり、4校総合選抜になる	7. 領海12海里・漁業専管水域200海里の実施
昭和53(1978)			4. 中国漁船が尖閣諸島で示威行為 5. 新東京国際空港の開港 8. 日中平和友好条約の締結 ○第二次石油危機
昭和54(1979)		2月24日 甲府中学校第56回思い出卒業式	6. 元号法の公布 東京サミットの開催
昭和55(1980)	岩波政雄	4月 1日 岩波政雄が第23代校長として着任	6. 史上初の衆参両院同時選挙に自由民主党が圧勝 ○自動車生産台数が世界一になる ◎日米貿易摩擦がおこる
		10月21日 創立百周年記念美術展を開催（～10月23日）	◎校内暴力の急増
		10月22日 創立百周年記念式・記念音楽会を挙行	◎政府開発援助（ODA）が世界最大規模になる
昭和56(1981)		5月23日 百周年記念館竣工式	2. 初の「北方領土の日」を開催 3. 中国残留孤児47名が初の正式来日
昭和57(1982)		9月30日 『佐久往還強行遠足20周年記念誌』発行	6. 東北新幹線開通 11. 上越新幹線開通 ○歴史教科書記述が国内外で問題化
昭和58(1983)	山村鉄夫	4月 1日 山村鉄夫が第24代校長として着任	3. 中国自動車道全線開通 5. 日本海中部地震 10. 田中角栄元首相のロッキード事件有罪判決
昭和59(1984)		4月 甲府地区総合選抜に甲府昭和高校を加えて5校総合選抜となる	1. 中曽根康弘首相による現職総理として戦後初の靖国参拝

年号(西暦)	校長	本校の特記事項	日本の歴史
昭和60(1985)		10月16日　強行遠足記念像除幕式	4. 電電公社・専売公社の民営化によりNTT・JTが発足 5. 男女雇用機会均等法の成立 8. 日航機が御巣鷹山に墜落（死者520人） 9. 5か国蔵相会議によりプラザ合意
		11月22日　文部省研究指定校公開研究発表会	
昭和61(1986)	望月政廣	2月19日　校歌碑除幕式 4月 1日　望月政廣が第25代校長として着任 10月12日　かいじ国体秋季大会開会式集団演技・式典音楽に参加	7. 衆参同時選挙で自民党が圧勝 11. 伊豆大島の三原山で大噴火 12. 予算案の防衛費がGNP1%突破 ○円高不況の深刻化（～1987）の対策として超低金利政策 ◎バブル経済が始まる
昭和62(1987)			4. 国鉄の分割民営化によりJRが発足
昭和63(1988)		7月　中込恵子（3年）がアーチェリーでソウル五輪に出場	3. 青函トンネルが開通　4. 瀬戸大橋が開通 7. リクルート事件が発覚
昭和64(1989) 平成元	三澤弘毅	4月 1日　三澤弘毅が第26代校長として着任 5月 8日　朱光館開館式	1. 昭和天皇の崩御 4. 消費税（3%）実施 7. 参議院議員選挙で自民党が大敗して与野党の議席逆転
平成2(1990)		10月31日　創立110周年記念式典を挙行	6. 日米構造協議
平成3(1991)	廣瀬重雄	4月 1日　廣瀬重雄が第27代校長として着任 4月 8日　英語科第1期生（45名）が入学 5月21日　写真集『百年の歩み』発行 7月16日　校舎改築準備委員会が開催	1. 湾岸戦争が勃発 4. ペルシア湾に掃海艇を派遣 11. 総評が解散して、日本労働組合総連合会が発足 ○バブル経済の崩壊
平成4(1992)		3月16日　中国研修旅行団出発（～3月21日） 3月　アメリカ短期留学が開始 3月19日　『強行遠足第65回記念強行遠足要覧』発行 5月22日　『百年誌』発行 8月27日　校舎解体神事　校舎に感謝する会 9月15日　校舎解体工事が始まる 10月13日　第66回強行遠足に北見北斗高校（北海道）の高校生が参加 10月22日　新校舎起工式	6. ＰＫＯ（国連平和維持活動）協力法の成立 9. ＰＫＯでカンボジアに自衛隊を派遣 ○平成不況が深刻化
平成5(1993)	伊藤嘉雄	2月24日　『百年誌追録』発行 4月 1日　伊藤嘉雄が第28代校長として着任 10月28日　新校舎への移転作業が始まる 11月17日　校舎竣工記念式典を挙行	7. 衆院総選挙で自民党が過半数割れ 8. 非自民8会派連立の細川護熙内閣が成立（55年体制終焉） ○米の大凶作で緊急輸入 ○ゼネコン汚職
平成6(1994)		4月12日　フーバー高校生来校（～4月14日） 9月27日　石橋湛山胸像除幕式	4. 細川首相が資金疑惑で辞職 6. 松本サリン事件 6. 自民・社会・さきがけ連立の村山富市内閣が成立
平成7(1995)	関口稔夫	4月 1日　関口稔夫が第29代校長として着任	1. 阪神・淡路大震災 3. 地下鉄サリン事件 9. 日本銀行の公定歩合が0.5%と過去最低（低金利時代） 11. 食糧法施行、食糧管理法廃止
平成8(1996)		1月31日　『創立115周年記念誌強行遠足はるかなる道のり』発行 8月　全国高校総合体育大会山梨県大会開催公開演技等に出場	1. 3党連立による橋本龍太郎内閣成立 3. 薬害エイズ訴訟で和解が成立　らい予防法の廃止
平成9(1997)	雨宮　惇	3月 1日　『第70回強行遠足記念誌』発行 4月 1日　雨宮惇が第30代校長として着任	4. 消費税が5%に引き上げ 6. 改正男女雇用機会均等法が成立 9. 日米防衛協力のための指針（新ガイドライン）に合意 12. 山陽自動車道が全線開通 ○不況下での国民の負担増　金融機関の破綻が相次ぐ
平成10(1998)		1月26日　高校推薦入試が始まる	6. 金融システム改革法の成立 ◎実質経済成長率が戦後2度目のマイナス成長

年号(西暦)	校長	本校の特記事項	日本の歴史
平成11(1999)	輿石順一	4月 1日 輿石順一が第31代校長として着任	5. 新ガイドライン関連法が成立 6. 男女共同参画社会基本法の公布 7. 新農業基本法の成立 8. 国旗・国歌法の成立 9. 茨城県東海村の核燃料工場で臨界事故
		12月 4日 四川省教育友好使節団来校	
平成12(2000)		4月 フーバー高校と姉妹校締結、フーバー高校生が来校	4. 介護保険制度が始まる 4. 小渕恵三首相の急病で森喜朗内閣が成立 7. 三宅島で噴火がおこり、全島民が避難 7. 九州沖縄サミットの開催
		10月19日 創立百二十周年記念甲一美術展開催(～10月23日)	
		10月20日 創立百二十周年記念式典を挙行 甲一音楽祭を開催	
平成13(2001)	山本秀彦	4月 1日 山本秀彦が第32代校長として着任 5月 1日 『創立百二十周年記念誌』発行	1. 中央省庁再編(1府12省庁) 2. えひめ丸が米国原子力潜水艦と衝突して沈没 4. 小泉純一郎内閣が成立 5. ハンセン病訴訟で政府が控訴断念 6. 大阪府池田小学校において児童殺傷事件がおこる 9. 国内初のＢＳＥ感染牛が発見 11. テロ対策特別措置法の公布 ○完全失業率5%突破
平成14(2002)		10月 3日 第76回強行遠足の際、松原湖検印所過ぎで生徒の死傷事故	5. 経団連と日経連が統合して日本経団連が発足 7. 日本郵政公社法の公布 8. 住民基本台帳ネットワーク稼働開始 9. 日朝首脳会談において日朝平壌宣言 10. 北朝鮮に拉致されていた5人が帰国
平成15(2003)	植松和夫	4月 1日 植松和夫が第33代校長として着任	5. 個人情報保護法の成立 6. 武力攻撃事態対処法など有事関連3法が成立 8. イラク復興支援特別措置法が成立
		10月 第77回強行遠足より終点地を野辺山に変更(男子53.7、女子31.0)	12. 米国産牛肉輸入禁止
平成16(2004)		4月 文部科学省指定(ＳＥＬＨi)(スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール)	1. イラクへの自衛隊派遣
		6月 山梨大学教育人間科学部附属中学校と連携授業を実施	6. 国民保護法など有事法制関連7法の成立 10. 新潟県中越地震
平成17(2005)	高瀬孝人	4月 1日 高瀬孝人が第34代校長として着任	4. ＪＲ西日本福知山線において脱線事故 10. 日本道路公団の民営化 郵政民営化法の公布 ◎平成の市町村大合併(2003～2005年ごろがピーク)
平成18(2006)		4月 2学期制を導入	7. イラクから自衛隊が撤収 9. 安倍晋三内閣が成立 12. 改正教育基本法の公布
平成19(2007)		3月 全県一学区・単独選抜高校入試の実施(総合選抜制度の廃止)、文部省指定ＳＥＬＨi終了、『第80回強行遠足記念誌』発行	1. 防衛庁が省に昇格 2. 年金記録問題の浮上
	新津 元	4月 1日 新津元が第35代校長として着任	
		4月 全県一学区制の一期生が入学	
		4月 45分7校時授業の実施	
		4月 台湾高校視察団来校	5. 国民投票法の成立 7. 参議院議員選挙で自民党が惨敗(ねじれ国会)
		10月 同窓会より創立127周年を記念してワゴン車が寄贈	9. 福田康夫内閣が成立
平成20(2008)		4月 1日 55分授業開始	7. 北海道洞爺湖サミット 9. 麻生太郎内閣が成立 ○世界的な金融危機
		10月 4日 第82回強行遠足で男子の終点を小海に変更(男子75.3km)	
平成21(2009)	跡部 和	4月 1日 跡部和が第36代校長として着任 学力向上F21プロジェクトを開始	3. ソマリア沖へ護衛艦を派遣 5. 裁判員制度の開始 8. 衆議院議員総選挙で民主党が圧勝 鳩山由紀夫内閣成立
		9月 創立130周年記念事業として自習室が完成	
		11月 創立130周年記念事業として新マイクロバスを納車	

年号(西暦)	校長	本校の特記事項	日本の歴史
平成22(2010)		4月　55分授業・ユニット制時間割を採用 4月　学校ホームページをリニューアル 6月　夏のオプション服としてポロシャツとスカートを導入 10月22日　創立130周年記念式典を挙行　記念演奏会を開催	4.「高校無償化」制度の開始 5. 子供手当の支給開始　菅直人内閣の成立 9. 尖閣諸島沖で中国漁船が日本の巡視船に衝突
平成23(2011)	奥田正直	3月 1日　『創立130周年記念誌』発行 4月 1日　奥田正直が第37代校長として着任	3. 東日本大震災　東京電力福島第一原発事故 9. 野田佳彦内閣の成立 ○尖閣・竹島をめぐって日中・日韓の関係が悪化
平成24(2012)		10月 6日　第86回強行遠足で、女子の出発を高根、終点を小海に変更（女子43.2km）	8. 消費税関連法の成立 10. 米軍が沖縄にオスプレイを配備 12. 衆議院議員総選挙で自民・公明両党が圧勝（第2次安倍晋三内閣が成立）
平成25(2013)		10月 5日　第87回強行遠足で、男子の終点を小諸に変更（男子105.7km）	1. 日本取引所グループの誕生（東京証券取引所と大阪証券取引所が合併） 4. 公職選挙法の改正（インターネット選挙運動解禁） 7. 参議院議員選挙で自民党が圧勝（両院のねじれ状態解消）
平成26(2014)	赤池　亨	4月 1日　赤池亨が第38代校長として着任 4月　文部科学省指定ＳＧＨ（スーパーグローバル・ハイスクール）	4. 消費税率を8%に引き上げ 12. 衆議院議員総選挙で自民・公明両党が2/3の議席を確保（第3次安倍晋三内閣の成立）
平成27(2015)			6. 改正公職選挙法(18歳選挙権)の成立 9. 安全保障関連法の成立 10. マイナンバー法の施行　ＴＰＰ交渉大筋合意
平成28(2016)	堀井　昭	4月 1日　堀井昭が第39代校長として着任 4月 8日　探究科第1期生（80名）が入学	4. 熊本地震 5. 伊勢志摩サミットの開催 7. 参議院議員選挙で18歳選挙権を運用（自民・公明両党の過半数維持） 8. 台風10号が東北に上陸（観測史上初）
平成29(2017)		3月 1日　『第90回強行遠足記念誌』発行	10. 衆議院議員総選挙で自民党が単独で多数議席を確保 11. 第4次安倍晋三内閣の成立 12. 閣議において2019年4月の天皇退位・新天皇即位決定
平成30(2018)		3月 1日　英語科第25期生が卒業（英語科最後の卒業生）	6. 成人年齢を18歳に引き下げる改正民法が成立（施行は2022年4月） 6. 大阪府北部地震 9. 北海道胆振東部地震
平成31(2019)	小林俊一郎	3月　文部科学省ＳＧＨ（スーパーグローバル・ハイスクール）終了 4月 1日　小林俊一郎が第40代校長として着任 4月　文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力型）」アソシエイト校	4. 天皇明仁陛下の退位・皇太子徳仁親王の即位（以後、明仁陛下は上皇、美智子陛下は上皇后）
令和元		10月12日　強行遠足が台風19号の直撃により中止	新型肺炎（新型コロナウイルス感染症）の蔓延
令和2(2020)		3月 3日　新型コロナウイルス感染拡大防止に係る全国一斉臨時休校 4月 7日　入学式等の取りやめ（入学手続きのみ） 4月　文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」指定 5月25日　時差・分散登校の開始（6月第2週に学校再開） 10月 3日　第93回強行遠足を県内一日コースで実施（男子43km、女子31km） 10月22日　創立140周年記念式典を挙行　記念講演を開催	4月7日　全国に対して緊急事態宣言が発令（～5月末）
令和3(2021)		3月 1日　『創立140周年記念誌』発行	1月7日　一都三県に対して緊急事態宣言が発令

歴代校長

初　代　吉田　義静

自 明治17年４月８日
至 明治20年３月24日

徽典館中学科
山梨県尋常中学校

第2代　平井　　正

自 明治20年７月13日
至 明治23年６月30日

創立10周年
甲府市錦町に校地移転

第3代　長倉　雄平

自 明治23年７月４日
至 明治23年10月11日

第4代　村上　孚光

自 明治23年10月11日
至 明治26年２月６日

第5代　黒川　雲登

自 明治26年３月30日
至 明治31年４月30日

第6代　幣原　　坦

自 明治31年５月24日
至 明治33年11月６日

山梨県中学校、旧甲府城内に校地移転、
創立20周年

第7代　大島　正健

自 明治34年３月26日
至 大正３年８月31日

山梨県立第一中学校、創立30周年、
山梨県立甲府中学校

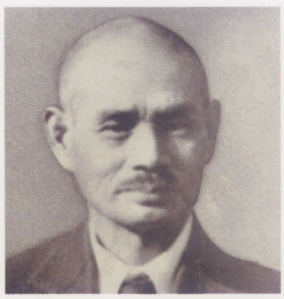
第8代　末久喜十郎

自 大正３年９月７日
至 大正６年７月９日

第9代　田村　喜作

自 大正６年７月９日
至 大正12年３月26日

創立40周年



第10代　江口　俊博

自 大正12年６月27日
至 昭和７年３月31日

強行遠足開始、現在地に校地移転、
創立50周年

第11代　隈部　以忠

自 昭和７年３月31日
至 昭和12年８月31日

第12代　大野　芳麿

自 昭和12年９月１日
至 昭和19年６月16日

創立60周年

第13代　永井　徳潤

自 昭和19年６月16日
至 昭和21年３月31日

第14代　近藤　兵庫

自 昭和21年３月31日
至 昭和25年３月31日

新制高校に移行、
校歌、校章決定

第15代　篠原　寛二

自 昭和25年３月31日
至 昭和29年１月17日

創立70周年

第16代　雨宮　重治

自 昭和29年４月１日
至 昭和32年３月31日

第17代　斎藤　俊章
自 昭和32年４月１日
至 昭和36年３月31日
創立80周年

第18代　広瀬　勝雄
自 昭和36年４月１日
至 昭和41年３月31日

第19代　高遠　啓一
自 昭和41年４月１日
至 昭和44年３月31日
甲府南高校との
総合選抜制度開始

第20代　根津　修蔵
自 昭和44年４月１日
至 昭和49年３月31日
創立90周年

第21代　若林　　勇
自 昭和49年４月１日
至 昭和51年３月31日
甲府西高校を加え
3校総合選抜制度開始

第22代　山下　　穆
自 昭和51年４月１日
至 昭和55年３月31日
甲府東高校を加え
4校総合選抜制度開始

第23代　岩波　政雄
自 昭和55年４月１日
至 昭和58年３月31日
創立100周年

第24代　山村　鉄夫
自 昭和58年４月１日
至 昭和61年３月31日
甲府昭和高校を加え
5校総合選抜制度開始

第25代　望月　政廣
自 昭和61年４月１日
至 平成元年３月31日

第26代　三澤　弘毅
自 平成元年４月１日
至 平成３年３月31日
創立110周年

第27代　廣瀬　重雄
自 平成３年４月１日
至 平成５年３月31日
新校舎建設
英語科第1期生入学

第28代　伊藤　嘉雄
自 平成５年４月１日
至 平成７年３月31日

第29代　関口　稔夫
自 平成７年４月１日
至 平成９年３月31日

第30代　雨宮　　惇
自 平成９年４月１日
至 平成11年３月31日
高校推薦入試開始

第31代　輿石　順一
自 平成11年４月１日
至 平成13年３月31日
創立120周年

第32代　山本　秀彦
自 平成13年４月１日
至 平成15年３月31日

第33代　植松　和夫

自 平成15年４月１日
至 平成17年３月31日

SELHi 指定開始

第34代　高瀬　孝人

自 平成17年４月１日
至 平成19年３月31日

2学期制導入
全県一学区単独入試制度開始

第35代　新津　　元

自 平成19年４月１日
至 平成21年３月31日

第36代　跡部　　和

自 平成21年４月１日
至 平成23年３月31日

創立130周年
55分授業・ユニット制導入

第37代　奥田　正直

自 平成23年４月１日
至 平成26年３月31日

強行遠足 小諸・小海コース復活

第38代　赤池　　亨

自 平成26年４月１日
至 平成28年３月31日

SGH指定開始
英語科募集停止

第39代　堀井　　昭

自 平成28年４月１日
至 平成31年３月31日

探究科第1期生入学

第40代　小林俊一郎

自 平成31年４月１日
至 現在

創立140周年
地域との協働による高等学校教育改革
推進事業(グローカル)型指定開始

校長 職務代行者

● 綿引　泰	自 明治13年10月19日	至 明治14年２月２日	山梨県中学校
● 坂根　正夫	自 明治14年８月20日	至 明治14年11月９日	山梨学校
● 広瀬　範治	自 明治15年２月　日	至 明治17年２月３日	徽典館
● 中川　　亨	自 明治20年４月１日	至 明治20年７月13日	山梨県尋常中学校
● 中川泰次郎	自 明治26年２月８日	至 明治26年３月29日	
● 中川　太郎	自 明治31年５月３日	至 明治31年６月３日	
● 加藤　秀一	自 明治33年11月８日	至 明治34年３月26日	
● 大竹　信治	自 大正12年３月30日	至 大正12年６月27日	
● 宮田　　亨	自 昭和29年１月18日	至 昭和29年３月31日	

column 校　　長

創立140周年を迎えた現在、本校の現職校長である小林俊一郎先生は、第40代に数えられる。しかし、創立から50年間の歴代校長10人は、時代によって数え方が異なるようだ。

「創立五十周年記念碑」に江口校長は自らを第7代と記しているし、ほぼ同時期に編纂された『創立五十周年記念誌』には第9代に数えられている。そもそも『創立五十周年記念誌』では、初代校長を平井正（現在は第2代として記録）、第2代校長を吉田義静（現在は初代校長として記録）されているし、両者の校長在任期間は「不明」と記されている。また現在では第3代校長とされている長倉雄平（現行の『学校要覧』によると在任期間は明治23年7月4日から同年10月11日の3か月間）の名前が記されていない。時期的には創立から10年間にあたる。

因みに、『学校要覧』では昭和50年代前半までは、初代校長・吉田義静、第2代校長・平井正、第3代校長・長倉雄平の名はなく、吉田義静と平井正の間に校長職務代行を務めたとされる中川亨が初代校長に数えられていた。昭和50年代後半になって、創立から10年間の校長職務代行者の名があらわれるが、昭和55年（創立100周年）直前まで、創立期の校長と職務代行者の区別はされていない。現在の代数が確定されたのは、創立100周年記念誌編纂の過程であろう。

歴代同窓会長

初　代 山本　　保
自 明治43年10月23日
至 大正３年９月20日

第２代 松谷　禄郎
自 大正３年９月20日
至 大正７年３月14日

第３代 深沢　議一
自 大正10年３月５日
至 大正11年３月

第４代 深沢　平重
自 大正７年３月14日
至 大正10年３月５日
自…大正11年3月(理事長)

第５代 島田　盛平
自
至

第６代 飯島　豊甫
自
至 昭和18年４月14日
理事長逝去につき
深澤平重氏が代行

第７代 新海　栄治
自
至

第８代 芦沢留次郎
自
至

第９代 小野　熊平
自
至

第10代 寺田　七男
自
至

第11代 矢崎茂三郎
自
至 昭和45年

第12代 清水　八束
自 昭和45年
至

第13代 高遠　啓一
自
至 昭和63年

第14代 飯島　　哲
自 昭和63年
至 平成元年
会長逝去につき
相川義仁氏が代行

第15代 相川　義仁
自 平成２年
至 平成４年５月

第16代 太田源一郎
自 平成４年５月
至 平成10年

第17代 海沼　　昭
自 平成10年
至 平成12年５月27日

第18代 井上　雅雄
自 平成12年５月27日
至 平成16年５月８日

第19代 飯田　祥雄
自 平成16年５月８日
至 平成18年５月28日

第20代 望月　操三
自 平成18年５月28日
至 平成20年５月17日

第21代 望月　政男
自 平成20年５月17日
至 平成24年５月19日

第22代 小田切常雄
自 平成24年５月19日
至 平成25年５月18日

第23代 金丸　信吾
自 平成25年５月18日
至 平成30年５月19日

第24代 宮島　雅展
自 平成30年５月19日
至 令和２年11月21日

第25代 丹沢　良治
自 令和２年11月21日
至 現在

※『創立五十周年記念誌』の「甲府中學校同窓會沿革」によると、第2代会長松谷禄郎氏の後任には「大正七年三月十四日総會に於て役員を改選、會長に深澤平重氏」(P34)とあり、更に「大正十年三月五日総會に於て深澤會長小澤副會長共に一身上の都合にて辞任、補欽として深澤議一氏會長に」(P35)とある。更に大正11年3月の総会において「会長制は会務執行上不便尠なからざるを以て之れを理事制に改むることを諮り、本會の事業も年と共に、益々堅實の発展を期する爲め満場之れに贊し理事制度に改め」たとあり、理事9氏の互選により「深澤平重氏理事長」の旨が記録されている。

過去の周年記念誌や同窓会記念誌等において、歴代同窓会長の在任期間が示されていないので、今回明らかにしようと考えたが資料整理が間に合わなかった。また、大正11年3月から理事制度に基づく理事長職が設けられたが、どの段階で現在の職制になったのかについても判明しないままになった。確認を後世に託すような形になっていることを御容赦いただきたい。

歴代PTA会長

昭和23年度	寺田　七男	昭和24年度	寺田　七男	昭和25年度	寺田　七男
昭和26年度	露木　寛	昭和27年度	名取　忠彦	昭和28年度	名取　忠彦
昭和29年度	平井　一満	昭和30年度	許山　整	昭和31年度	大石　利雄
昭和32年度	米沢　良和	昭和33年度	小野　熊平	昭和34年度	篠原　良雄
昭和35年度	高野孫左衛門	昭和36年度	小田切　彰	昭和37年度	許山　整
昭和38年度	鷹野　慶次郎	昭和39年度	佐々木　秀春	昭和40年度	飯島　哲
昭和41年度	小野　熊平	昭和42年度	佐藤　森蔵	昭和43年度	原　忠三
昭和44年度	篠原　方泰	昭和45年度	矢崎　実	昭和46年度	小田切　順三
昭和47年度	石原　博雄	昭和48年度	相川　義仁	昭和49年度	加賀美一三男
昭和50年度	海沼　昭	昭和51年度	上原　美好	昭和52年度	大塚　篤郎
昭和53年度	遠藤　周次	昭和54年度	笠井　忠文	昭和55年度	広瀬　昇
昭和56年度	橘田　正彦	昭和57年度	山本　栄彦	昭和58年度	渡辺　守人
昭和59年度	小川　貢生	昭和60年度	保坂　哲朗	昭和61年度	入倉　吟二
昭和62年度	望月　政男	昭和63年度	岡島　泰三	平成元年度	高野　洋志雄
平成２年度	小澤　照洋	平成３年度	古屋　力	平成４年度	中村　信雄
平成５年度	田中　正喜	平成６年度	小林　聰一郎	平成７年度	酒井　昌男
平成８年度	遠藤　順彦	平成９年度	輿水　孝樹	平成10年度	土橋　博司
平成11年度	原　経光	平成12年度	切刀　利一	平成13年度	安江　一
平成14年度	皆川　巖	平成15年度	関　徳明	平成16年度	定月　直樹
平成17年度	大久保　広行	平成18年度	武内　有二	平成19年度	古屋　裕一
平成20年度	齋藤　義一	平成21年度	西山　正盛	平成22年度	佐藤　茂樹
平成23年度	楳窪　一浩	平成24年度	鷹野　一雄	平成25年度	平嶋　育造
平成26年度	依田　訓彦	平成27年度	石原　基平	平成28年度	清水　栄一
平成29年度	大沢　正聖	平成30年度	水村　勝	令和元年度	笠井　和人
令和２年度	若月　栄治				

記念誌編集委員会（令和元年度）

委員長	﨑田　哲	本校教頭	（昭和60年卒）
副委員長	丹沢良治	本校同窓会副会長（当時）	（昭和41年卒）
	依田訓彦	本校同窓会副会長	（昭和56年卒）
委員	大西　勉	本校同窓会顧問	（昭和34年卒）
	金子　寛	本校同窓会事務局長	（昭和43年卒）
	若月栄治	本校令和２年度PTA会長	（平成２年卒）
	内藤　浩	本校教諭（第３学年主任、当時）	（昭和55年卒）
	望月靖公	本校教諭（進路指導係）	（昭和55年卒）
	土屋浩之	本校教諭（総務広報主任）	（昭和56年卒）
	野澤俊英	本校教諭（教務主任、当時）	（昭和61年卒）
	萩原久美子	本校教諭（学習研究主任）	
	安達栄子	本校教諭（総務広報副主任）	
	伊東弘美	本校教諭（総務広報係）	
	吉野和美	本校実習講師（総務広報係）	

※令和２年度は組織されず。

編集後記

「創立140周年記念誌」編集委員会は、令和元年８月に組織されましたが、その年度中に４回の会議を行った後は、新型コロナウイルス感染拡大によって学校の日常が奪われた中で、一度も開催できなくなってしまいました。

そのような状況を経ながらも、令和２年度卒業証書授与式の日に、無事、発行の日を迎えられたことに安堵しておりますが、その一方で、「記念誌編集を任せていただくからには、夢があった」ことを考えると、様々な反省も残ります。記念誌の内容等については、同窓諸氏からの御不満もあろうことかと思いますが、これにつきましては、偏に編集委員長である私の不徳の致すところであり、どうかお許しをいただきたくお願い申し上げます。

ただ、できる限りのことをしました。制作に当たっては、(株)少國民社の社長をはじめ、担当の皆様に大変な御苦労をおかけ致しました。この場を借りて、心よりお礼申し上げます。

記念誌のタイトルは「Be Gentleman！」としました。本校にはなじみのある言葉ですが、「紳士たれ！」ではなく、このような時代だからこそ「良識をもって行動できる人間であれ！」と訳したいと考えます。

この記念誌は特集を3本立てとし、特集Ⅰでは創立140周年記念式典・記念講演及び記念事業を、特集Ⅱでは平成23年からの10年間…つまり創立131周年から140周年までの10年間を取り上げました。そして特集Ⅲでは本校の歴史と伝統の中で培われた有形・無形の文化財を「至宝」として紹介する機会としました。

100年に一度の深刻な感染症の拡大に苦しみながら、発行の日に漕ぎつけたこの冊子を、「新しき世の鑑」として歩む同窓諸氏ならびに在校生の座右に置いていただければ幸いです。

山梨県立甲府第一高等学校創立140周年記念誌
Be Gentleman!

発行日　令和３（2021）年３月１日発行
発行者　山梨県立甲府中学校・甲府第一高等学校創立140周年記事業協賛会
編集者　山梨県立甲府第一高等学校創立140周年記念誌編集委員会
〒400-0007　山梨県甲府市美咲２丁目13－44
電　話　055－253－3525（代表）
印刷所　株式会社　少國民社
〒400-0851　山梨県甲府市住吉1丁目13－1
電　話　055－226－2125（代表）

Be Gentleman!

山梨県立甲府第一高等学校 創立140周年記念誌